

# InstallShield 2009

2008 年 6 月 5 日

## はじめに

InstallShield 2009 には多くの新機能および強化機能が含まれています。主な内容は次のとおりです。

- InstallShield 前提条件を機能と関連付ける機能
- Setup.exe および Update.exe ブートストラップの Unicode バージョンを作成する機能
- マネージコード カスタム アクションのサポート
- 製品の複数インスタンスをインストールするためのサポート
- Windows Installer パッケージに関連する複雑な問題をトラブルシューティングするための新しい MSI ツール
- Setup.exe と ISSetup.dll にストリームされるファイルを圧縮し、圧縮レベルを指定できる機能
- 改善された Standalone Build と InstallShield の間の互換性
- コマンドラインと MSBuild からパッチをビルドすることができる機能
- アラビア語 (サウジアラビア) と ヘブライ語のサポート
- ベスト プラクティス ダイナミック ファイル リンク
- [インストールされる前提条件] 一覧から InstallShield 前提条件を隠す機能
- 新しい収益源となる Yahoo! ツールバーをインストールへ追加するためのサポート

InstallShield 2009 には、Windows Installer 4.5 ベータ用に次の機能がサポートされています：

- トランザクション処理を使用して複数のパッケージをインストールする
- InstallScript MSI インストールで InstallScript エンジンを含め UI ハンドラとして使用する
- 共有コンポーネントのパッチを使用する
- パッチのアンインストール時のみカスタム アクションを実行する

InstallShield 2009 には、その他の重要なテクノロジーもサポートされています：

- Visual Studio 2008
- .NET Framework 3.5
- .NET Framework 3.0 SP1
- .NET Framework 3.0 Language 言語パック
- .NET Framework 2.0 SP1 (x86、x64、IA64)
- SQL Server 2005 Express SP2

- Windows Mobile 6.x
- .NET Compact Framework 3.5
- SQL Server Compact Edition 3.5

リリース ノートのアップデートを含む **InstallShield 2009** についての最新情報は、ナレッジベース記事「[Q200150](#)」をご覧ください。

## 新しい機能

### InstallShield 前提条件を機能と関連付けて、インストールを連鎖させる機能

InstallShield では、InstallShield 前提条件を 1 つまたは複数の機能と関連付けられるようになりました。この新しい種類の InstallShield 前提条件は、機能前提条件と呼ばれます。機能前提条件は、前提条件を含む機能がインストールされたときに、その前提条件がシステム上に既にインストールされていない場合にインストールされます。

プロジェクトに InstallShield 前提条件を含めると、複数のインストールを連鎖させることができるため、1 度に 1 つの実行シーケンスのみしか実行できない Windows Installer 制限を迂回することができます。Setup.exe セットアップ ランチャは、連鎖を管理するブートストラップ アプリケーションとしての役割を果たします。

[再配布可能ファイル] ビューを使って、InstallShield 前提条件をプロジェクトに追加して、その前提条件をメイン インストールの前に実行するのか、メイン インストールに含まれる 1 つまたは複数の機能と関連付けるのかを指定できます。

以前は、すべての InstallShield 前提条件インストールが、メイン インストールの実行前に実行されたため、InstallShield 前提条件を機能に関連付けることはできませんでした。この種類の前提条件は今後も使用できますが、今回よりセットアップ前提条件という名前が使用されます。

基本の MSI と Web プロジェクトが、この機能のサポートを含みます。

### トランザクション処理を使った複数パッケージのインストールを可能にする Windows Installer 4.5 ベータ サポート

InstallShield を使って、基本の MSI と InstallScript MSI プロジェクトに Windows Installer パッケージをチェーンされた .msi パッケージとして追加できます。基本の MSI または InstallScript MSI インストールにチェーンされた .msi パッケージが含まれていて、ターゲットシステムに Windows Installer 4.5 が存在するとき、Windows Installer はトランザクション処理を使って複数のパッケージをインストールします。パッケージをチェーンすることによって、単一のトランザクションとして処理します。トランザクションに含まれる 1 つまたは複数のパッケージが正しくインストールされなかった場合、またはエンドユーザーがインストールをキャンセルした場合、Windows Installer は全てのパッケージについてロールバックを開始して、システムを以前の状態に復元します。

[リリース] ビューの [チェーンされた .msi パッケージ] 領域で、メイン インストールに連鎖させる 1 つまたは複数の .msi パッケージをプロジェクトに追加できます。この領域ではまた、チェーンされた .msi パッケージにリリース フラグを割り当てたり、チェーンされたパッケージを起動するのに使用するコマンドライン パラメータなどの設定を構成したり、条件を指定したりできます。

### InstallScript MSI インストールで InstallScript エンジン埋め込みユーザー インターフェイスとして使用できる Windows Installer 4.5 ベータ サポート

InstallScript MSI プロジェクトでは、InstallScript エンジンを埋め込みカスタム ユーザー インターフェイス (UI) ハンドラとして使用するオプションが追加されました。従来、InstallScript エンジンは外部カスタム UI ハンドラとして使用されていました。Windows Installer 4.5 は、この新しい機能をサポートします。この新しい埋め込みオプションを使用すると、エンドユーザーがインストールを .msi パッケージから直接起動できると共に、InstallScript で定義された高度にカスタマイズされたユーザー インターフェイスを含んだインストールを作成できます。

この新しい埋め込み **InstallScript UI** 機能と、従来の外部 **InstallScript UI** 機能のどちらを使用するかを指定するには、新しい **"InstallScript ユーザー インターフェイスの種類"** 設定を使います。この設定は [一般情報] ビューの [プロジェクトのプロパティ] 領域にあり、プロジェクト全体に反映されます。デフォルトで、**InstallShield** はすべての **InstallScript MSI** プロジェクトで従来のスタイルを使用します。この従来型のオプションには、**Setup.exe** セットアップ ランチャが必要です。

新しく **INSTALLSCRIPTMSIEUI** 変数が追加されました。新しいスタイルが使用される時、この変数は実行時に **True** に設定されます。それ以外の場合は **False** に設定されます。

新しいスタイルには、従来のスタイルには適用されなかった制限事項がいくつかありますので、ご注意ください。たとえば、一部の **InstallScript** 関数およびコマンドライン パラメータは、新しいスタイルでは、サポートされていないか、または動作が異なるものがあります。これらの 2 つのスタイルについての詳細は、**InstallShield** ヘルプ ライブラリの「**InstallScript MSI** インストールで **InstallScript** エンジン

を外部エンジンとして使用する方法と、埋め込み UI ハンドラとして使用する方法の違い」を参照してください。

### 共有コンポーネントのパッチにおける **Windows Installer 4.5** ベータ サポート

**InstallShield** では、**Windows Installer 4.5** で提供されている新しい共有コンポーネントのパッチ機能がサポートされています。**[コンポーネント]** ビューの新しい "複数パッケージの共有コンポーネント" 設定を使って、選択したコンポーネントについて共有コンポーネントのパッチを有効にするかどうかを指定できます。**[はい]** を選択すると、新しいコンポーネントの属性が設定されます。この属性は、複数のパッケージ間で共有されているコンポーネントを含むパッチがアンインストールされるときに、**Windows Installer** がファイルをダウングレードすることを阻止します。これによって、最新バージョンを含むパッチがアンインストールされた場合でも、ターゲット システム上に常にコンポーネントの最新バージョンが保持されます。このオプションのデフォルト値は **[いいえ]** です。

**Windows Installer 4.5** はこの新しい機能をサポートします。**Windows Installer** の以前のバージョンは、この新しい設定を無視します。また、ターゲット システムで **DisableSharedComponent** ポリシーが **1** に設定されている場合、**Windows Installer** はすべてのパッケージについて、この設定を無視します。

この機能は、基本の **MSI**、**InstallScript MSI**、およびマージ モジュール、トランスフォーム、および **Web** プロジェクトに適用します。

### 優先コンポーネントの **Windows Installer 4.5** ベータ サポート

**[コンポーネント]** ビューに追加された新しい "置き換えられたコンポーネントのアンインストール" 設定を使って、特定の条件下で優先するパッチのインストール中に、選択されたコンポーネントを **Windows Installer 4.5** が処理する方法を指定できます。現在のパッチに含まれるこのコンポーネントをアンインストール用にフラグすることで、優先するパッチが適用された後にターゲット システム上でこのコンポーネントが孤立しないようにするためには、**[はい]** を選択します。後続のパッチがインストールされ、またそれが最初のパッチよりも優先されることがフラグされている場合、適切な場合に **Windows Installer** はこのコンポーネントを登録解除およびアンインストールします。**[いいえ]** を選択した場合、優先するパッチはターゲット マシン上に孤立したコンポーネントを残す可能性があり、後に残された機能のコンポーネントの管理は一切行われません。この設定のデフォルト値は **[いいえ]** です。

**Windows Installer 4.5** はこの新しい機能をサポートします。**Windows Installer** の以前のバージョンは、この新しい設定を無視します。

この機能は、基本の **MSI**、**InstallScript MSI**、およびマージ モジュール、トランスフォーム、および **Web** プロジェクトに適用します。

### **Windows Installer 4.5** ベータにおけるパッチのアンインストール時のみカスタム アクションを実行できる機能

カスタム アクションのための新しい "パッチのアンインストールのみ実行" 設定を利用して、**Windows Installer** が選択されたカスタム アクションをパッチのアンインストール時のみ実行するかどうかを指定できます。この設定は、基本の **MSI**、**InstallScript**、**InstallScript MSI**、**MSI** データベース、トランスフォーム、および **Web** プロジェクトの **[カスタム アクション**

とシーケンス] ビューにあります。 マージ モジュール プロジェクトおよび MSM データベース プロジェクトでも提供されています。

また、カスタム アクション ウィザードの [追加のオプション] パネルにある [パッチのアンインストール時に実行する] チェックボックスを利用しても、カスタム アクションの動作を構成することができます。

## Windows Installer 4.5 再配布可能ファイルのベータ サポート

InstallShield には、Windows Installer 4.5 用に以下の InstallShield 前提条件ファイル (.prq) が含まれています:

- Microsoft Windows Installer 4.5 Pre-Vista (x86)
- Microsoft Windows Installer 4.5 Pre-Vista (x64)
- Microsoft Windows Installer 4.5 Pre-Vista (IA64)
- Microsoft Windows Installer 4.5 Vista (x86)
- Microsoft Windows Installer 4.5 Vista (x64)

[再配布可能ファイル] ビューを使って、これらの InstallShield 前提条件をどれでもプロジェクトに追加することができます。ただし、InstallShield は Windows Installer 4.5 再配布可能ファイルのベータ版を含めることはできませんので、ご注意ください。またマイクロソフトより、Windows Installer 4.5 前提条件に必要な再配布可能ファイルの RTM バージョンは、現在のところ提供されていません。[再配布可能ファイル] ビューで、これらの InstallShield 前提条件のそれぞれの [場所] 列には「ダウンロードの必要あり」が表示されます。これらの前提条件の 1 つをダウンロードしようとする、ファイルが使用不可能なため、InstallShield がエラーを表示してダウンロードが失敗します。

これらの再配布可能ファイルの RTM バージョンがマイクロソフトからリリースされ次第、同社の Web サイトからダウンロードが可能になります。その時点で、InstallShield Program Files フォルダ内の適切なサブフォルダに、再配布可能ファイルを追加してください。これらの前提条件に適したサブフォルダを決定するとき、InstallShield を使って自動的に作成するのが最も簡単な方法です。そのためには、InstallShield の [再配布可能ファイル] ビューを開きます。使用する Windows Installer 4.5 再配布可能ファイルの InstallShield 前提条件を右クリックしてから、[選択したアイテムをダウンロードする] をクリックします。InstallShield はエラーを表示してダウンロードが失敗しますが、その結果、InstallShield は選択された前提条件のファイル用に、InstallShield Program Files フォルダ内に適切なフォルダを作成します。フォルダは、InstallShield Program Files Folder\SetupPrerequisites\Windows Installer\4.5 ディレクトリ内のサブディレクトリです。このフォルダにマイクロソフトの .exe または .msu ファイルを追加してから、リリースをビルドします。マイクロソフトから Windows Installer 4.5 再配布可能ファイルのベータ版を取得した場合、それらを適切な InstallShield Program Files フォルダに追加して、マイクロソフトから RTM バージョンがリリースされるまでの間、テスト用に使用できます。

この機能は、基本の MSI、InstallScript MSI、Web プロジェクトに適用します。

## Setup.exe および Update.exe プートストラップの Unicode バージョンを作成する機能

今回より、基本の MSI、または Web プロジェクトで Setup.exe セットアップランチャを作成するとき、Unicode バージョンで作成するか、または ANSI バージョンで作成するかを指定することができます。以前、基本の MSI または Web プロジェクトにセットアップランチャが含まれているとき、常に ANSI バージョンがビルドされていました。Unicode バージョンのビルドはサポートされていませんでした。

Unicode セットアップランチャは、ターゲットシステムで 2 バイト言語のための適切なコード ページが実行されているいにかかわらず、セットアップランチャのユーザー インターフェイスで 2 バイト文字を正しく表示することができます。ANSI セットアップランチャは、ターゲットシステムで適切なコード ページが実行されている場合のみ、セットアップランチャ ダイアログで 2 バイト文字を正しく表示します。適切なコード ページが実行されていない場合、これらのダイアログで 2 バイト文字が文字化けして表示されます。

[リリース] ビューでリリースについて表示される Setup.exe タブに新しく追加された "最短初期化時間" 設定を利用して、Unicode を使うか、または ANSI を使うかを指定することができます。すべての新しい基本の MSI と Web プロジェクトでは、Unicode がデフォルトとして使用されます。

パッチまたは QuickPatch パッケージについて Update.exe アップデート ランチャを作成するときも、Unicode バージョンで作成するか、または ANSI バージョンで作成するかを指定することができます。

[パッチのデザイン] ビューでパッチ構成について表示される Setup.exe タブに新しく追加された "アップデート ランチャの種類" 設定を利用して、Unicode を使うか、または ANSI を使うかを指定することができます。QuickPatch プロジェクトでは、"アップデート ランチャの種類" 設定は [一般情報] ビューの [ビルド設定] 領域の [詳細] タブにあります。すべての新しいパッチ構成と QuickPatch パッケージでは、Unicode がデフォルトとして使用されます。

Unicode バージョンの Setup.exe を利用することで、1-19067P が解決されます。

### Setup.exe ブートストラップのログファイルを作成する機能

基本の MSI と Web プロジェクトで、Setup.exe セットアップ ランチャ用に新しい /debuglog コマンドライン パラメータが追加されました。このコマンドライン パラメータを使用して、デバッグ用のログ ファイルを生成することができます。このパラメータと共に、完全パスと .log ファイル名を引用符を使って指定します。Setup.exe が書き込み可能な場所にある場合、/debuglog パラメータを単純に Setup.exe に渡します。これにより、InstallShield.log という名前のログ ファイルが Setup.exe ファイルと同じフォルダに作成されます。

### マネージコード カスタム アクションのサポート

InstallShield では、マネージ コード カスタム アクションを基本の MSI プロジェクト、InstallScript MSI プロジェクト、マージ モジュール プロジェクト、Web プロジェクトに追加することができます。この種類のカスタム アクションは、Visual Basic .NET または C# などのマネージ コードで書かれた .NET アセンブリ内にあるパブリック メソッドを呼び出します。

### 新しい収益源となる Yahoo! ツールバーをインストールへ追加するためのサポート

InstallShield に新しく追加された [付加価値サービス] ビューを使って、InstallShield インストールに付加価値サービスを組み込むと、これらのサービスがインストールまたは使用されたときにサービス契約条件に従って収益を得られます。

この InstallShield リリースは、付加価値サービスのサポート (Yahoo! 払い戻しプログラム) が 1 つ含まれています。このプログラムに参加する場合、[付加価値サービス] ビューを通してインストール プロジェクトに Yahoo! ツールバーを追加します。エンドユーザーが製品と共に Yahoo! ツールバーをインストールした場合、Yahoo! ツールバーが使用されるたびに報酬が支払われません。

このサポートは、基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、および Web プロジェクト タイプで利用できます。

### 製品の複数インスタンスをインストールするためのサポート

InstallShield では今回より、.msi パッケージを使って同じマシン上に同じコンテキストで製品の複数インスタンスをインストールすることができるインストールの作成をサポートします。[リリース] ビューの製品構成に追加された新しい [複数インスタンス] タブを使って製品の異なるインスタンスを定義し、各インスタンスの関連プロパティを構成することができます。

ビルド時、InstallShield は各インスタンスに対して製品コードを変更するためのインスタンス トランスフォームを作成し、それを .msi パッケージにストリームされます。実行時、セットアップ ランチャは [新しいインスタンスの選択] ダイアログを表示します。このダイアログでエンドユーザーは新しいインスタンスをインストールするか、インストール済みインスタンスのアップデートまたはメンテナンスを行うかを指定することができます。

さらに今回より、[パッチのデザイン] ビューでインストールに複数インスタンス サポートを含む製品用のパッチをビルドすると、エンドユーザーが特定のインスタンスまたはすべてのインスタンスを更新することができるパッチが作成されます。実行時、Update.exe ファイルはパッチ バージョンの [インスタンスの選択] ダイアログを表示します。

Setup.exe と Update.exe に新しい /instance コマンドライン オプションが追加されました。このオプションを使って、インストール、更新、またはアンインストールするインスタンスを指定することができます。また、[インスタンスの選択] ダイアログを抑制することも可能です。

複数インスタンスのサポートは、基本の MSI プロジェクトと Web プロジェクトで提供されています。

## 新しい Microsoft .NET 再配布可能ファイル

InstallShield には今回、基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトに追加することができる .NET 関連の新しい InstallShield 前提条件がいくつか含まれています。

- Microsoft .NET Framework 3.5 (Web ダウンロード版)
- Microsoft .NET Framework 3.5 (完全パッケージ)
- Microsoft .NET Framework 3.0 SP1 (Web ダウンロード版)
- Microsoft .NET Framework 3.0 言語パック
- Microsoft .NET Framework 2.0 SP1 (x86、x64、IA64)

また InstallShield では、InstallScript プロジェクト用のアップデートされた Microsoft .NET Framework オブジェクトも利用できます。このオブジェクトには、32 ビット、64 ビット x64、および 64 ビット Itanium バージョンを含む、バージョン 3.5、3.0 SP1、3.0、2.0 SP1、2.0、1.1 SP1、および 1.0 SP3 の .NET Framework のサポートが含まれています。オブジェクトには、Web ダウンローダ再配布可能ファイルだけでなく、利用可能なサポート対象の言語パックも含まれています。

## 新しい .msi パッケージ ツール

InstallShield には、いくつかの新しいツールが含まれています：

- **InstallShield MSI Diff** は、2 つの .msi、.msm、.msp、または .pcp ファイルを素早く比較します。これを使って、1 つの .msi ファイルに対して 1 つまたは複数の .msp と .mst ファイルを適用し、その結果となる .msi データベースの変更を確認することができます。また、このツールを使って、バイナリ形式で保存された 2 つの InstallShield プロジェクトファイル (.ism または .ise) を比較することができます。このツールでは、追加、変更、削除、スキーマの違いを示すためにカラー コードが使用されます。このツールは、ほとんどのソース コード管理システムに簡単に統合できます。
- **InstallShield MSI Query** は、SQL ステートメントをビルド スクリプトで実行する前に、SQL の Windows Installer バージョンを使ってテストを行います。SQL ステートメントが正しくフォーマットされているかを素早く確認でき、また生成される結果を参照できます。
- **InstallShield MSI Sleuth** は、ターゲット システムの現在のインストール済み状態を参照できる診断ツールです。InstallShield MSI Sleuth はインストール済みのすべての .msi パッケージの一覧を表示します。リストの中から任意の .msi パッケージをクリックすると、データベース内のテーブルやバイナリ ストリームだけでなく、その機能とコンポーネントの状態および既知のソースの場所を参照できます。このツールは、特定のコンポーネント コードを持つパッケージを含むインストール済みの製品 (複数可) を識別するのに役立ちます。
- **InstallShield MSI Grep** は、.msi パッケージのコレクションの中から特定のテキストを検索します。特定のテーブルまたは列に関する結果のみを表示するための詳細検索も可能です。

これらすべてのツールは、Windows [スタート] メニューの [InstallShield ツール] サブフォルダから起動できます。

これらの InstallShield MSI ツールは、InstallShield の Premier および Professional エディションで提供されています。Premier エディションには、別のマシンに InstallShield 以外のツールのみをインストールできる、個別のインストールおよび追加ライセンスが含まれています。詳しい使用条件については、InstallShield MSI ツールの使用許諾契約書を参照してください。

## Setup.exe と ISSetup.dll にストリームされるファイルを圧縮し、圧縮レベルを指定できる機能

今回より、Setup.exe セットアップ ランチャまたは ISSetup.dll (InstallScript エンジンを含みます) ファイルを使用するリリースをビルドしたとき、InstallShield によって、Setup.exe ファイルまたは ISSetup.dll ファイルにストリームされるファイルが圧縮されるようになりました。InstallShield が使用するデフォルトの圧縮レベルは、ファイルのサイズと実行時に圧縮ファイルを展開するために必要な時間のバランスをとっての目安です。圧縮レベルを変更する場合、または圧縮をしない場合、マシン全体に適用する設定を利用してデフォルトのレベルをオーバーライドすることができます。

デフォルトで、ビルド時に InstallShield がファイルを Setup.exe ファイルにストリームするとき、.cab ファイル拡張子を持つファイルは圧縮されません。これは、.cab ファイルが既に圧縮されているファイルであるためです。デフォルトの圧縮除外一覧

を変更して、他の種類のファイルや特定のファイルを必要に応じて選択することができます。除外一覧は、マシン全体に適用される設定です。

この圧縮機能は、基本の MSI、InstallScript MSI、Web プロジェクトに適用します。

### マルチパート .cab ファイルのサポート

.cab ファイルには、いくつかの制限事項があります。たとえば、単一 .cab ファイルの最大サイズは 2 GB に設定されています。また、サイズの大きい .cab ファイルを署名しようとしたとき、およびサイズの大きい署名済み .cab ファイルのデジタル署名を検証しようとしたときにトラブルが生じた経験があるユーザーもいるかもしれません。今回より、これらの制限事項を回避するために、.cab ファイルのデフォルトの制限が 600 MB に設定されました。InstallShield で、リリースの .cab ファイルを作成しているとき、この制限に達すると、データが 2 つ以上の .cab ファイルに分割され、マルチパートの .cab ファイルが作成されます。

最大サイズは必要に応じて変更することができます。InstallShield でマルチパート .cab ファイルを作成しない場合、単一の .cab ファイルを作成するように構成できます。

この機能は、基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトタイプに適用されます。また、この機能は、すべてのファイルが単一ファイルの .msi パッケージまたは Setup.exe セットアップランチャーに埋め込まれている圧縮済みネットワークイメージリリースをビルドしている場合のみ適用します。この機能は、1 つまたは複数の機能に関連付けられているファイルのみが .cab ファイルに圧縮されるカスタム圧縮には適用しません。

### 基本の MSI または Web インストールに [ファイルを開く] ダイアログを追加して、エンドユーザーによるファイルの参照を可能にするサポート

InstallShield は、基本の MSI または Web インストールのダイアログの 1 つから [ファイルを開く] ダイアログを起動するサポートを含みます。エンドユーザーがダイアログの 1 つから [参照] ボタンをクリックすると、[ファイルを開く] ダイアログが起動します。[ファイルを開く] ダイアログを使って、エンドユーザーはファイルを参照できます。エンドユーザーがファイルを選択して [開く] ボタンをクリックすると、[ファイルを開く] ダイアログが閉じて、インストールがダイアログの編集フィールドにその完全パスとファイル名を書き込みます。インストールはまた、IS\_BROWSE\_FILEBROWSED プロパティの値を、エンドユーザーが選択したファイルのパスとファイル名に設定します。

この機能を利用するには、プロジェクトに FileBrowse という名前の Windows Installer DLL カスタムアクションを追加する必要があります。このカスタムアクションは FileBrowse.dll ファイルを呼び出します。さらに、[ファイルを開く] ダイアログを起動する編集フィールドコントロールと [参照] ボタンを追加して、関連ダイアログイベントを設定しなくてはなりません。詳しい手順については、InstallShield ヘルプ ライブラリの「[ファイルを開く] ダイアログを起動する」を参照してください。

この機能により IOC-000050776 が解決されました。

### 追加された Microsoft SQL Server 2005 Express SP2 前提条件

InstallShield に Microsoft SQL Server 2005 Express Edition SP2 の InstallShield 前提条件が追加されました。InstallShield 前提条件は、基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトに追加することができます。

この機能により IOC-000065171 が解決されました。

### MySQL 5.0 サポート

InstallShield の [SQL スクリプト] ビューで、製品がサポートするターゲット データベース サーバーを指定するときに選択可能な定義済みデータベース サーバーのリストに、MySQL の 5.0.x バージョンもリストされるようになりました。これまでは、カスタム バージョン要件を作成しなくてはなりませんでした。

### Microsoft Visual Studio 2008 サポート

InstallShield が Visual Studio 2008 と統合され、インストールと製品の開発を同じ Visual Studio インターフェイス内で行えるようになりました。

### Visual Studio セットアップとマージ モジュール プロジェクトを InstallShield プロジェクトに変換する機能

今回より、InstallShield で、Visual Studio 2008、Visual Studio 2005、Visual Studio .NET 2003、または Visual Studio .NET セットアップ プロジェクト (.vdprj) を基本の MSI プロジェクト (.ism) に変換することができるようになりました。また、Visual Studio 2008、Visual Studio 2005、Visual Studio .NET 2003、または Visual Studio .NET マージ モジュール プロジェクト (.vdprj) を InstallShield マージ モジュール プロジェクト (.ism) に変換することもできるようになりました。

Visual Studio プロジェクトを InstallShield プロジェクトに変換すると、ダイアログ エディタを使ってダイアログ のレイアウトを視覚的に変更したり、インストール パッケージとマージ モジュールの検証を行ったり、InstallShield で提供されている他の機能を利用したりすることができます。

## Windows Mobile 6.x のサポート

InstallShield でインストールを作成するとき、Windows Mobile 6.x Professional、Windows Mobile 6.x Classic、または Windows Mobile 6.x Standard が搭載されているデバイスを直接ターゲットすることができるようになりました。これは、基本の MSI プロジェクト、InstallScript MSI プロジェクト、およびスマート デバイス、および Web プロジェクトに適用します。

## サポート対象 Windows Mobile プラットフォームの一覧を更新または変更できる機能

Windows Mobile ウィザードとスマート デバイス セットアップ ウィザードで、モバイル デバイスにインストールされるプラットフォーム要件を設定することができます。プラットフォームは、定義済みのプラットフォーム一覧から選択することができます。今回より、定義済み一覧にないプラットフォームをターゲットする必要がある場合、または、特定の定義済みプラットフォームに関連付けられている構成設定を変更する必要がある場合、InstallShield と共にインストールされている Settings.xml を編集することにより、これらを達成することができるようになりました。以前、プラットフォーム一覧は Settings.xml ファイルで構成できなかったため、新しいプラットフォームをサポートする新しいバージョンの InstallShield にアップグレードする必要があります。これは、基本の MSI プロジェクト、InstallScript MSI プロジェクト、およびスマート デバイス、および Web プロジェクトに適用します。

## 新しい、モバイル デバイス用の .NET Compact Framework 3.5 と SQL Server Compact Edition 3.5 再配布可能ファイル

モバイル デバイス インストール用の新しい再配布可能ファイル (.NET Compact Framework 3.5、SQL Server Compact 3.5、SQL Server Compact 3.5 Replication、および SQL 3.5 Client) が利用できるようになりました。これは、基本の MSI プロジェクト、InstallScript MSI プロジェクト、およびスマート デバイス、および Web プロジェクトに適用します。

## アラビア語 (サウジアラビア) とヘブライ語サポート、およびダイアログ エディタの右から左方向に書く言語サポート

InstallShield には、右から左に記述する言語であるアラビア語 (サウジアラビア) とヘブライ語のサポートが新しく含まれています。デフォルトのエンド ユーザー ダイアログ文字列のすべてが、これらの言語で利用できます。

これらの言語は右から左方向に読まれるため、InstallShield にはアラビア語とヘブライ語ダイアログのミラー サポートが含まれます。これによって、アラブ語とヘブライ語のダイアログには、右から左方向へのレイアウトが使用されます。たとえば、英語やその他の左から右に読まれる言語のダイアログで右側にあるボタンは、右から左に読まれる言語のダイアログでは左側に移動されます。また InstallShield は、ビルトイン ダイアログ テーマで表示されるダイアログ イメージのミラー画像バージョンを使用します。

右から左方向へのレイアウトと反転イメージは、InstallShield の [ダイアログ] ビュー内の [ダイアログ エディタ] ペイン、および実行時に使用されます。

アラビア語とヘブライ語のサポートは、InstallShield Premier Edition で利用できます。Premier Edition には、35 の言語サポートが含まれています。

基本の MSI、マージ モジュール、および Web プロジェクト タイプに、この機能のサポートが含まれています。

この機能により、17591、1-677QE、1-9R7FX、1-9S3RT、1-KNTH2、および IOB-000004752 が解決されました。



## InstallScript ファイル (.rul) の文字列テーブル エントリの検証

InstallScript ファイル (.rul) を含むプロジェクトをビルドするとき、InstallScript コードに @ 演算子を使用する文字列テーブル エントリへの参照を 1 つ以上含まれている場合、InstallShield はビルド時に文字列テーブル エントリを検証します。

プロジェクトに含まれる InstallScript ファイルの文字列識別子がプロジェクトの文字列テーブルで定義されていない場合、InstallShield はビルド警告 -7174 を表示します。

これは、InstallScript カスタム アクションを含む基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、および InstallScript カスタム アクションを含む Web プロジェクト タイプに適用します。

この機能により IOC-000058433 が解決されました。

## 新しい FLEXnet Connect 11 再配布可能ファイル

InstallShield はまた、基本の MSI プロジェクトおよび InstallScript MSI プロジェクトで FLEXnet Connect 11 をサポートします。InstallShield の [アップデート通知] ビューを使って、2 つの FLEXnet Connect 11 マージ モジュールうち、いずれかが含まれています (Common Software Manager が含まれているマージ モジュールと、含まれていないマージ モジュール)。FLEXnet Connect 11 では、パフォーマンスが向上しています。

## 強化機能

### ベスト プラクティス ダイナミック ファイル リンク

プロジェクトにダイナミック ファイル リンクを追加、または変更するとき、InstallShield がコンポーネントを作成する方法について、新しいベスト プラクティスを使用するか、これまでと同様にディレクトリごとに 1 つのコンポーネントを作成するのかを指定できるようになりました。

コンポーネント作成のベスト プラクティスに従うと、ダイナミック リンクを持つフォルダにある各ポータブル実行可能ファイル (PE) にコンポーネントが別々に作成されます。ダイナミック リンクがある PE ファイルの 1 つを更新するパッチをあとで作成する場合、「ディレクトリごとに 1 つのコンポーネント」方式の代わりに、この方式を利用したほうが、パッチを簡単に作成できます。

以前、ダイナミック ファイル リンクをプロジェクトに追加すると、ビルド時に、ダイナミック リンクを持つすべてのファイルについてコンポーネントが 1 つ自動的に作成されていました。ただし、ダイナミック ファイル リンクに PE ファイルが含まれているとき、コンポーネントの作成時に Windows Installer ベスト プラクティスが実行されませんでした。

デフォルトで、InstallShield は .exe、.dll、.ocx、.vxd、.chm、.hlp、.tlb、および .ax を PE ファイルとして認識します。[オプション] ダイアログ ボックスにある新しい [ファイルの拡張子] タブで、この一覧を変更することができます。

オートメーション インターフェイスに、新しいベスト プラクティス メソッドのサポートが追加されました。

ISWiDynamicFileLinking オブジェクトに、ダイナミック ファイル リンクにベスト プラクティス方式、または以前提供されていた「ディレクトリごとに 1 つのコンポーネント」方式を使用するかを指定できる新しい CreateBestPracticeComponents プロパティが追加されました。AddDynamicFileLinking メソッドを使用して新しいダイナミック ファイル リンクを作成すると、ベスト プラクティス メソッドがデフォルトで使用されます。

ベスト プラクティス ダイナミック ファイル リンクは、基本の MSI プロジェクト、InstallScript MSI プロジェクト、マージ モジュール プロジェクト、Web プロジェクトに適用します。

### 実行時に InstallShield 前提条件のインストール進行状況を表示できる機能

InstallShield 前提条件エディタの [動作] タブに追加された新しいチェック ボックスを使って、実行時に Windows Installer からのインストール進行状況メッセージと共に、前提条件のインストールのステータス バーも表示するかどうかを指定できます。この機能は、前提条件が .msi ファイルを起動する場合のみ使用が可能で、Setup.exe ファイルを起動する場合は使用できません。

この機能が利用可能になる以前に作成された新しい前提条件や、既存の前提条件では、デフォルトで進行状況は表示されません。この動作は、[動作] タブに追加された新しいチェック ボックスを選択して変更できます。

進行状況の表示を指定した場合、利用可能なコマンドライン パラメータのうち一部のみがサポートされている点に、ご注意ください。詳しい情報については、InstallShield ヘルプ ライブラリの「前提条件のコマンドライン パラメータを指定する」を参照してください。

### [インストールされる前提条件] 一覧から InstallShield 前提条件を隠す機能

ターゲット システムに 1 つまたは複数のセットアップ前提条件のインストールが必要な場合、実行時、メイン インストールが実行する前にセットアップ前提条件ダイアログが表示されます。InstallShield 前提条件エディタの [動作] タブに追加された新しいチェック ボックスを使って、前提条件ダイアログで表示される前提条件のリストからセットアップ前提条件を隠すことを指定できます。前提条件を隠した場合、インストールが必要な前提条件の 1 つとしてリストされていなくても、条件がそれを必要したときに前提条件がインストールされます。

この機能が利用可能になる以前に作成された新しい前提条件や既存の前提条件は、デフォルトで表示されます。この動作は、[動作] タブに追加された新しいチェック ボックスを選択して変更できます。

この強化により IOC-000050963 が解決されました。

### InstallShield 前提条件の再起動動作に追加された新しいオプション

InstallShield 前提条件エディタの [動作] タブでは、ターゲット マシンの再起動が必要な可能性がある場合、InstallShield 前提条件のインストールの処理方法を指定できます。[前提条件が再起動を必要としているように見える場合] リストで、動作を指定できます。このリストには [記録する。マシンが再起動された場合、再開を失敗して、インストールの後に再起動する] と呼ばれる新しいオプションが追加されました。実行時に再起動が必要であるように見える場合で、メインのインストールが終了するまで (または次の前提条件が再起動をトリガするまで) 延期したいときは、この新しいオプションを選択します。

### 仮想ディレクトリを含まない IIS Web サイトをインストールできる機能と、Web サイトをコンポーネントと関連付けられる機能

InstallShield は、今回より、仮想ディレクトリを一切含まない IIS Web サイトのインストールをサポートできるようになりました。また、[インターネット インフォメーション サービス] ビューで Web サイトを選択すると表示される [全般] タブには "コンポーネント" 設定が追加されました。この設定を使って選択された Web サイトとコンポーネントを関連付けることができます。これらの強化によって、Web サイトに関連付けられた仮想ディレクトリまたはコンポーネントがインストールされると、ターゲット マシン上にその Web サイトが作成されます。

Web サイトがコンポーネントと関連付けられている場合、Web サイトの [アンインストール時に Web サイトを削除する] チェック ボックスは、そのコンポーネントの "パーマネント" 設定 (基本の MSI、InstallScript MSI、または Web プロジェクトの場合) または "アンインストール" 設定 (InstallScript プロジェクトの場合) に対応します。つまり、Web サイトの [アンインストール時に Web サイトを削除する] チェック ボックスを選択またはクリアすると、自動的にコンポーネントの "パーマネント" 設定または "アンインストール" 設定が適切に更新されます。

以前、InstallShield では Web サイトとコンポーネントを関連付けるためのサポートが提供されていませんでした。そのため、インストールに含まれる Web サイトが仮想ディレクトリを持たない場合、ランタイムに Web サイトが作成されませんでした。

InstallShield 2009 の [インターネット インフォメーション サービス] ビューを使って新しい Web サイトを追加すると、InstallShield は自動的にその Web サイトをコンポーネントに関連付けます。IIS Web サイトを含む InstallShield 2008 以前のプロジェクトをアップグレードした場合、その Web サイトは自動的にコンポーネントに関連付けられません。

基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、および Web プロジェクト タイプで、これらの IIS 強化内容をサポートします。

InstallScript プロジェクトで Web サイトがコンポーネントに関連付けられている場合、その Web サイトに追加される仮想ディレクトリも同じコンポーネントに関連付けなくてはなりません。したがって、1 つまたは複数の仮想ディレクトリを含む Web サイトのコンポーネントを変更しようとすると、InstallShield はメッセージ ボックスを表示して、Web サイトの仮想ディレクトリのすべてに対して、同じコンポーネントの変更が行われることを通知します。このメッセージ ボックスは、Web サイトに含まれ

任意の仮想ディレクトリのコンポーネントを変更しようとした場合にも表示されます。どちらの場合も、メッセージボックスはコンポーネントの変更を続行するか、キャンセルするか選択肢を提供します。基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトでは、Web サイトのすべての仮想ディレクトリと同様に、Web サイトを同じコンポーネントに保持することが必須ではありませんが、推奨されます。

この強化により IOC-000067479 が解決されました。

### QuickPatch パッケージの簡素化

今回より、一般的に以前の InstallShield でビルドされたパッケージに比べて新しいサブ機能とビルトイン InstallShield カスタムアクションの数が少ない、簡素化された QuickPatch パッケージのビルドが可能となりました。QuickPatch プロジェクトの [詳細] タブに追加された "QuickPatch の簡素化" 設定で、この新しいタイプの QuickPatch パッケージを作成するかどうかを指定することができます。

この強化により 1-11PUY5 が解決されました。

### QuickPatch プロジェクトのパッチとアップグレードの検証サポート

QuickPatch プロジェクトをビルドしたとき、InstallShield はパッチとアップグレードの検証を実行するようになりました。この検証は、QuickPatch パッケージを使って製品のアップグレードを試みるときに発生する可能性のある、一般的な問題を識別するのに役立ちます。

これまでパッチとアップグレードの検証は、基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトで [パッチのデザイン] ビューで作成されたパッチでしか利用できませんでした。

### ビルド時の検証に複数 .cub ファイルを選択できる機能

InstallShield の [オプション] ダイアログボックスにある [検証] タブでは、InstallShield 内でビルドされたインストールパッケージまたはマージモジュールを検証する際に使用される .cub ファイルを複数指定できるようになりました。

また、IsCmdBld.exe を使ったコマンドラインビルド (Standalone Build のコマンドラインビルドを含む) で、-m コマンドラインパラメータを使って複数の .cub ファイルを渡すこともできるようになりました。.ini ファイルを使ってコマンドラインにパラメータを渡す場合、今回より .ini ファイルの CubFile パラメータに複数の .cub ファイルを指定することができます。

MSBuild 用の InstallShield タスクの RunMsiValidator パラメータが強化され、複数の .cub ファイルを使用できるようになりました。

### コマンドラインと MSBuild からパッチをビルドすることができる機能

IsCmdBld.exe を使ったコマンドラインビルド (Standalone Build のコマンドラインビルドを含む) で、-patch\_config パラメータを使用できるようになりました。このパラメータを使って、コマンドラインからパッチをビルドできます。

.ini ファイルを使ってコマンドラインにパラメータを渡す場合、.ini ファイルの [Project] セクションに追加された PatchConfigName パラメータを使って、ビルドするパッチ構成を指示することができます。

また、MSBuild の InstallShield タスクに、MSBuild を使ってビルドするパッチ構成を指定することができる PatchConfiguration パラメータが追加されました。

この強化によって、1-BBBFU、1-OB6BT、および IOA-000028308 が解決されました。

### /v コマンドラインパラメータを複数回使用して、Setup.exe から .msi ファイルに複数のパラメータを渡すことができる機能

Msiexec.exe に複数の引数を渡す場合、コマンドラインで /v オプションを複数回 (1 引数につき 1 回) 使用することができます。以前、/v オプションの使用は 1 回に限られていたため、すべてのパラメータはこのインスタンスを通して渡されていました。

基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトタイプに、この強化機能サポートが含まれています。

この強化により IOC-000060083 が解決されました。

## InstallShield ベストプラクティス スイートの新しい検証ツール

ISBP20 は InstallShield ベスト プラクティス スイートで利用可能な新しい検証ツールです。 ISBP20 は、Registry テーブルに含まれるレジストリ エントリが、ルート レベルのレジストリ キーや、その削除によってターゲット マシン上でのトラブルの原因となるようなキーの削除が行われないことを検証します。

InstallShield ベスト プラクティス スイートは、InstallShield Premier Edition の基本の MSI、InstallScript MSI、MSI データベース、および Web プロジェクトで利用できます。

この強化により IOC-000063437 が解決されました。

## 改善された Standalone Build と InstallShield の間の互換性

今回より、InstallShield Premier Edition で提供されている Standalone Build は、InstallShield がプログラム ファイルに使用するディレクトリ構造と同じディレクトリ構造を使用します。 これにより、InstallShield があるマシンから再配布可能ファイルや他のファイルを Standalone Build があるマシンにコピーするとき、同じ相対パスを使用できるようになりました。 以前、異なるディレクトリ構造が別々に使用されていました。

また、InstallShield のコマンドライン ビルドで使われる ISCmdBld.exe も Standalone Build と共にインストールされています。 以前、Standalone Build は別のファイル (IsSaBld.exe) をコマンドライン ビルドで使用していました。 ISCmdBld.exe は今回より、以前 IsSaBld.exe のみがサポートしていたパラメータをサポートします。

- **-o <マージ モジュール検索パス>** — プロジェクトで参照されるマージ モジュール (.msm) ファイルを含むカンマで区切ったフォルダを指定します(複数指定可)。
- **-t <Microsoft .NET Framework のパス>** — Microsoft .NET Framework へのパスを指定します。 パスは、ビルドマシンにインストールされている .NET Framework の場所です。
- **-h** — ビルドの終わりでアップグレード検証ツールをスキップすることを示します。
- **-g <最小ターゲット MSI バージョン>** — ターゲット マシン上でインストールに必要な Windows Installer の最小バージョンを指定します。
- **-j <最小ターゲット Microsoft .NET Framework バージョン>** — ターゲット マシン上でインストールに必要な .NET Framework の最小バージョンを指定します。

この強化の一部として、Standalone Build のインターフェイスで、InstallShield と同じ ISWiAutomation15.dll ファイルが使用されるようになりましたが、インストールされる場所は異なります。 InstallShield オートメーション インターフェイスと共に動作する既存のオートメーション スクリプトがある場合、スタンドアロン オートメーション インターフェイスと共に使用するためにスクリプト全体でライブラリの名前を IswiAutoN から SAAutoN に変更する作業は必要なくなりました。 この変更により、ISWiProject オブジェクトに、以前 Standalone オートメーション インターフェイスでのみ提供されていたいくつかのプロパティのサポートが追加されました。

- DotNetFrameworkPath
- MergeModuleSearchPath
- MinimumTargetDotNetVersion
- MinimumTargetMSIVersion
- SelfRegistrationMethod
- SkipUpgradeValidators

互換性の改善により、別々の 2 セットのバイナリの代わりに 1 セットのバイナリのみが Standalone Build と にビルドされるため、InstallShield ホットフィックスまたはサービス パックがリリースされたとき、それを Standalone Build と InstallShield に使用することができます。 以前、別々のホットフィックスとサービス パックが必要でした。

## パッチと QuickPatch パッケージをパスワードで保護する機能

今回より、パッチと QuickPatch パッケージをパスワードで保護するためのパスワード設定が追加されました。これらの設定は基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトでは [パッチのデザイン] ビューの [詳細] タブに、また QuickPatch プロジェクトでは [詳細] タブにあります。

パッチまたは QuickPatch パッケージをパスワードで保護すると、すべてのエンド ユーザーはパッケージをインストールする時に、アップデートを起動するためのパスワード (大文字と小文字を区別する) を入力しなくてはなりません。

この強化により IOC-000059643 が解決されました。

### SQLBrowse 実行時ダイアログで、ローカル、リモート、エイリアス SQL Server を参照が可能

SQLBrowse ダイアログのフィルタ機能が強化されました。基本の MSI、InstallScript MSI、および Web インストールで、[SQL Server の参照] コンボ ボックスとリスト ボックス コントロールにリモート サーバーのみを表示するには、新しく追加された Windows Installer プロパティ IS\_SQLSERVER\_REMOTE\_ONLY を設定します。基本の MSI、InstallScript MSI、および Web インストールで、[SQL Server の参照] コンボ ボックスとリスト ボックス コントロールにサーバー エイリアスのみを表示するには、新しく追加された Windows Installer プロパティ IS\_SQLSERVER\_ALIAS\_ONLY を設定します。以前は、ローカル サーバーのみを表示するフィルタだけしか利用できませんでした。これには、IS\_SQLSERVER\_LOCAL\_ONLY プロパティを設定します。これらのプロパティを任意に組み合わせ、SQL Server 参照コンボ ボックスとリスト ボックス コントロールで、複数の種類のサーバーを表示することができます。

InstallScript プロジェクトに、次の 2 つの新しい InstallScript 関数が追加されました:

- SQLRTSetBrowseOption — この関数を利用して、[SQL Server の参照] コンボ ボックスとリスト ボックス コントロールで、ローカル サーバー、リモート サーバー、サーバーのエイリアス、またはこれらのサーバーの組み合わせを表示するかどうかを指定できます。
- SQLRTGetBrowseOption — この関数は、[SQL Server の参照] コンボ ボックスとリスト ボックス コントロールの参照オプションの現在の値を返します。これは、ローカル サーバー、リモート サーバー、サーバー エイリアス、およびこれらのサーバーの組み合わせを表示できます。

この強化により IOC-000061680 が解決されました。

### SQL データベース サーバーの最小要件が満たされない場合でもインストールを続行する機能

[SQL スクリプト] ビューで SQL 接続を選択すると表示される [要件] タブに、新しい [最小要件が満たされていない場合でもインストールの続行を許可する] チェック ボックスが追加されました。

このチェック ボックスを選択すると、ターゲットシステム上でデータベース サーバーの最小要件が満たされていない場合、ランタイムは SQL 接続とその SQL スクリプトのすべてをスキップしてインストールを続行します。

このチェック ボックスをクリアして最小要件が満たされない場合、エンド ユーザーはインストールを続行することができません。これがデフォルトの動作です。

この強化は、基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、および Web プロジェクトに適用します。

この強化により IOC-000062139 が解決されました。

### SQL Server エイリアスのサポート

SQL ランタイム サポートが強化され、インストールが SQLBrowse ダイアログで SQL Server のエイリアス名をリストできるようになりました。また SQLLogin ダイアログを使って、エンド ユーザーはエイリアス名で SQL Server に接続することが可能です。

この強化は、基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、および Web プロジェクトに適用します。

この強化により IOB-000048483 が解決されました。

### DIM 依存関係の強化

新しく追加された [オプション] ダイアログ ボックスの DIM タブでは、DIM リファレンスをプロジェクトに追加したときに InstallShield が DIM 依存関係を検索する場所を指定することができます。また、DIM リファレンスと依存関係の DIM ファイルが自動的にプロジェクトに追加されるようになりました。

### エラー カスタム アクションの拡張サポート

このカスタム アクション ウィザードに、指定されたエラー メッセージを表示し、失敗を戻して、インストールを終了するタイプ 19 カスタム アクションのサポートが追加されました。以前、この種類のカスタム アクションを作成するには、[カスタム アクションとシーケンス] ビューで [カスタム アクション] エクスプローラを右クリックしてから、[エラー] をクリックするか、またはダイレクト エディタを利用して、手動でカスタム アクションのテーブル エントリを入力する必要がありました。

基本の MSI、InstallScript MSI、マージ モジュール、MSI データベース、MSM データベース、トランスフォーム、および Web プロジェクト タイプでエラー カスタム アクションがサポートされるようになりました。以前、基本の MSI プロジェクト、InstallScript MSI プロジェクト、および Web プロジェクトでのみサポートされていました。

### ソース ファイルにデジタル署名するかどうかを指定できる機能

[リリース] ビューの [署名] タブに、新しい [元の場所にあるファイルに署名する] チェック ボックスが追加されました。このチェック ボックスを利用して、InstallShield で、元のソース ファイルにも署名をするか、またはリリースに組み込まれるファイルのみ署名するかを指定できます。このチェック ボックスは、リリース ウィザードの [デジタル署名のオプション] パネルでも提供されています。このチェック ボックスは、デフォルトで、クリアになっています。

基本の MSI、InstallScript MSI、または Web プロジェクトで、このチェック ボックスを選択すると、もともと署名されていないファイルを含むリリースの圧縮バージョンと非圧縮バージョンの両方を更新する単一のパッチを作成する場合に便利です。

以前、このチェック ボックスがなかったため、InstallShield で元の場所にあるファイルを署名することができませんでした。

オートメーション インターフェイスには、このあたらしいデジタル署名機能のサポートが含まれています。ISWiRelease オブジェクトに、InstallShield が元のソース ファイルに署名するか、リリースに組み込まれたファイルにのみ署名するかを指定できる SignFilesInPlace プロパティが追加されました。

この強化により IOC-000062841 が解決されました。

### 改良されたスタティック COM 抽出

スタティック COM 抽出を使用する場合、Registry テーブルのプライマリ キーを生成するときに InstallShield が MD5 アルゴリズムを使用するようになりました。したがって、COM データが変更されない場合、パッケージの異なるバージョン間や、抽出された COM データが更新されるときにプライマリ キーが変更されることはありません。

以前、InstallShield はスタティック COM 抽出中に作成されたプライマリ キーにはランダム値を使用しました。その結果、COM データが更新されたとき、またはパッチがビルドされたとき、COM データが変更されていないにも関わらず新しいプライマリ キーが作成される可能性があります。パッチに関しては、プライマリ キーが変更された場合に COM データがパッチに含まれます。パッチが変更されていない COM データを持つコンポーネントを更新した場合、パッチのアンインストール中に COM データが削除される可能性があり、これは製品の以前のバージョンに問題をもたらす原因となりかねません。

この強化は、基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトに適用します。

### Windows Mobile デバイス用インストールのロールバック サポート

InstallShield は今回より、デスクトップからデバイスへのインストールに含まれる Windows Mobile 搭載デバイス用のインストールのロールバックをサポートします。したがって、エンド ユーザーが Windows Mobile 搭載デバイスに製品をインストール中に [キャンセル] ボタンをクリックしたとき、インストールがロールバックし、関連 .ini ファイル、.cah ファイル、および .ico ファイルのすべてが削除されます。

### 現在のプロジェクトを InstallShield 2008 プロジェクトとして保存するための PropertySchemaVersion プロパティの値

オートメーション インターフェイスを通して、ISWiProject オブジェクトの PropertySchemaVersion プロパティで新しい値 epv140 を使用することにより、InstallShield 2009 プロジェクトを InstallShield 2008 プロジェクト (.ism) として保存することができます。詳しい情報は、「PropertySchemaVersion プロパティ」の説明をご覧ください。

## .NET Framework 3.5 および .NET Framework 3.0 SP1 向け InstallScript 言語強化サポート

新しい FOLDER\_DOTNET\_35 InstallScript 変数が追加されました。この変数は、.NET Framework 3.0 ファイルのパスを格納します。Is 関数と使用するための 2 つの新しい定数が追加されました：

- REGDB\_KEYPATH\_DOTNET\_35
- REGDB\_KEYPATH\_DOTNET\_30\_SP

.NET Framework 3.0 の SP1 またはそれ以降のサービス パックがインストールされているかどうかをクエリするとき、REGDB\_KEYPATH\_DOTNET\_30\_SP 変数を使用できます。.NET Framework 3.0 の RTM バージョンがインストールされているかどうかを検出するには、REGDB\_KEYPATH\_DOTNET\_30 を使用します。

## 一時ファイルを作成する Windows API GetTempFileName を呼び出す、新しい GetTempFileNameIS 関数

GetTempFileNameIS という名前の新しい InstallScript 関数が追加されました。この関数は Windows API GetTempFileName を呼び出して一時ファイルを作成し、その関連アクションを実行します。

## プロジェクトのアップグレードに関するアラート

以下は、InstallShield 2008 および以前のバージョンで作成されたプロジェクトを InstallShield 2009 にアップグレードする際に発生する可能性がある問題についての情報です。また、新しい InstallShield 2009 プロジェクトと InstallShield 2008 以前のバージョンから InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクト間の潜在的な動作の違いについてもアラートします。最新情報はナレッジベース記事 [Q200151](#) を参照してください。

## InstallShield の以前のバージョンで作成されたプロジェクトのアップグレードに関する一般情報

InstallShield 2009 を使って以前のバージョンで作成されたプロジェクトを開くと、プロジェクトを新しいバージョンに変換するかどうかを質問するメッセージ ボックスが表示されます。[変換する] を選択すると、変換が行われる前に、例えば 0.766 というファイル拡張子が付加されたプロジェクトのバックアップ コピーが作成されます。以前のバージョンの InstallShield でこのプロジェクトを再度開く場合、元のプロジェクトのファイル名から 0.766 を取り除いてください。InstallShield 2009 プロジェクトを以前のバージョンの InstallShield で開くことはできませんので注意してください。

InstallShield 2008、InstallShield 12 以前、InstallShield DevStudio、InstallShield Professional 7 以前、および InstallShield Developer 8 以前のバージョンの InstallShield で作成された既存プロジェクトを InstallShield 2009 にアップグレードできます。InstallShield MultiPlatform または InstallShield Universal で作成されたプロジェクトは InstallShield 2009 にアップグレードすることはできませんので、ご注意ください。

## 追加された新しいリリース用のデフォルト セットアップ ランチャ値: Windows Installer Is Not Included

基本の MSI、InstallScript MSI、または Web プロジェクトで新しいリリースを作成するとき、Windows Installer エンジンの再配布可能ファイルがデフォルトで含まれなくなりました：

- リリース ウィザードを使って新しいリリースを作成する場合、[セットアップ ランチャ] パネルで Windows Installer を含めるかどうかを指定します。"これらのオペレーティング システムをサポートする" 設定のデフォルト値は [Windows Installer をインストールしない] です。以前のデフォルト値は [Windows 9X と NT の両方] でした。
- 今回より、[リリース] ビューの [リリース] エクスプローラで新しいリリースを右クリックすると、[Setup.exe] タブにある [セットアップ ランチャ] 設定のデフォルト値は [はい (MSI エンジンを含めない)] です。この設定の以前のデフォルト値は [はい (Windows NT および Windows 9x MSI エンジンを含める)] でした。

この変更は、新しい InstallShield 2009 プロジェクトで作成されたすべての新しいリリースに適用します。

プロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 へアップグレードする場合、この変更はすべての新しいリリースに適用します。InstallShield の以前のバージョンで作成されたリリースの値が自動的に変更されることはありません。

## Setup.exe および Update.exe ブートストラップの Unicode バージョンと ANSI バージョン

今回より、基本の MSI、または Web プロジェクトで Setup.exe セットアップ ランチャを作成するとき、Unicode バージョンで作成するか、または ANSI バージョンで作成するかを指定することができます。以前、基本の MSI または Web プロジェクトにセットアップ ランチャが含まれているとき、常に ANSI バージョンがビルドされていました。Unicode バージョンのビルドはサポートされていませんでした。

Unicode セットアップ ランチャは、ターゲット システムで 2 バイト言語のための適切なコード ページが実行されているいにかかわらず、セットアップ ランチャのユーザー インターフェイスで 2 バイト文字を正しく表示することができます。ANSI セットアップ ランチャは、ターゲット システムで適切なコード ページが実行されている場合のみ、セットアップ ランチャ ダイアログで 2 バイト文字を正しく表示します。適切なコード ページが実行されていない場合、これらのダイアログで 2 バイト文字が文字化けして表示されます。

InstallShield 2009 で、新しい基本の MSI プロジェクトまたは Web プロジェクトのリリースを作成したとき、デフォルトのセットアップ ランチャの種類は Unicode になります。また、InstallShield 2009 で新しいパッチ構成または新しい QuickPatch プロジェクトを作成したときも、デフォルトのアップデート ランチャの種類は Unicode になります。

基本の MSI または Web プロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 にアップグレードした場合、既存のリリースのセットアップ ランチャの種類はすべて ANSI です。種類は、必要に応じてオーバーライドが可能です。[リリース] ビューでリリースについて表示される Setup.exe タブに新しく追加された "最短初期化時間" 設定を利用して、Unicode を使うか、または ANSI を使うかを指定することができます。

同様に、基本の MSI プロジェクトまたは QuickPatch プロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 へアップグレードした場合、既存のパッチのアップデート ランチャの種類はすべて ANSI です。種類は、必要に応じてオーバーライドが可能です。パッチの場合、[パッチのデザイン] ビューでパッチ構成について表示される Setup.exe タブに新しく追加された "アップデート ランチャの種類" 設定を利用して、Unicode を使うか、または ANSI を使うかを指定することができます。

QuickPatch プロジェクトでは、"アップデート ランチャの種類" 設定は [一般情報] ビューの [ビルド設定] 領域の [詳細] タブにあります。

## ダイナミック ファイル リンク

プロジェクトにダイナミック ファイル リンクを追加、または変更するとき、InstallShield がコンポーネントを作成する方法として、新しいベスト プラクティスを使用するか、これまでと同様にディレクトリごとに 1 つのコンポーネントを作成するのを指定できます。これらの方式は、基本の MSI プロジェクト、InstallScript MSI プロジェクト、マージ モジュール プロジェクト、Web プロジェクトに適用されます。

InstallShield 2009 で新しいダイナミック ファイル リンクを作成すると、InstallShield はデフォルトでベスト プラクティス メソッドを使用します。

InstallShield 2008 以前で作成されたすべてのダイナミック ファイル リンクは、[1 つのディレクトリごとに 1 つのコンポーネント] メソッドを使用します。ダイナミック ファイル リンクがあるプロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 にアップグレードした場合、InstallShield は、既存するダイナミック ファイル リンクのコンポーネントを作成するとき、継続して「ディレクトリごとに 1 つのコンポーネント」方式を使用します。アップグレードされたプロジェクトで作成した新しいダイナミック ファイル リンクには、デフォルトでベスト プラクティス メソッドが使われます。2 つのコンポーネント作成方式および適切な方式の選択方法については、「ダイナミック リンクがあるファイルの適切なコンポーネント作成方法を判別する」を参照してください。

## IIS Web サイトと関連コンポーネント

InstallShield は、今回より、仮想ディレクトリを一切含まない IIS Web サイトのインストールをサポートできるようになりました。また、Web サイトをコンポーネントに関連付けることも可能です。これらの強化によって、Web サイトに関連付けられた仮想ディレクトリまたはコンポーネントがインストールされると、ターゲット マシン上にその Web サイトが作成されます。



InstallShield 2009 の [インターネット インフォメーション サービス] ビューを使って新しい Web サイトを追加すると、InstallShield は自動的にその Web サイトをコンポーネントに関連付けます。IIS Web サイトを含む InstallShield 2008 以前のプロジェクトをアップグレードした場合、その Web サイトは自動的にコンポーネントに関連付けられません。Web サイトとコンポーネントを関連付けるには、[インターネット インフォメーション サービス] ビューでその Web サイトを選択したときに表示される [全般] タブを使います。

今回より、Web サイトがコンポーネントと関連付けられている場合、Web サイトの [アンインストール時に Web サイトを削除する] チェックボックスは、そのコンポーネントの "パーマネント" 設定 (基本の MSI、InstallScript MSI、または Web プロジェクトの場合) または "アンインストール" 設定 (InstallScript プロジェクトの場合) に対応します。つまり、Web サイトの [アンインストール時に Web サイトを削除する] チェック ボックスを選択またはクリアすると、自動的にコンポーネントの "パーマネント" 設定または "アンインストール" 設定が適切に更新されます。

## QuickPatch パッケージの簡素化

QuickPatch プロジェクトの [詳細] タブにある新しい "QuickPatch の簡素化" 設定は、InstallShield で QuickPatch パッケージのビルド方法を決定します。簡素化された QuickPatch には、簡素化されていない QuickPatch パッケージに比べ、より少ない数の新しいサブ機能とカスタム アクションが含まれています。

場合によっては、QuickPatch パッケージの簡素化ができない場合があります。たとえば、インストール済みのファイルを削除するように QuickPatch パッケージを構成した場合、簡素化は行えません。

新しい QuickPatch プロジェクトを作成したとき、"QuickPatch の簡素化" 設定のデフォルト値は [はい] に設定されています。ただし、QuickPatch プロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 へアップグレードした場合、"キャッシュパス" 設定は [いいえ] となっています。この値は、必要に応じて変更が可能です。さらに詳しい情報は、InstallShield ヘルプライブラリの「QuickPatch パッケージを簡素化するかどうかを指定する」を参照してください。

## アップグレードとパッチの検証

QuickPatch プロジェクトをビルドしたとき、InstallShield はパッチとアップグレードの検証を実行するようになりました。したがって、InstallShield 2009 で QuickPatch パッケージをビルドしたとき、検証エラーおよび警告が表示される場合があります。InstallShield 2008 以前で QuickPatch プロジェクトをビルドしたとき、InstallShield はアップグレードとパッチの検証を実行しないため、ビルド時にパッチまたはアップグレードの検証エラーまたは警告が表示されることはありませんでした。

さらに、QuickPatch プロジェクトおよび基本の MSI と InstallShield MSI プロジェクトの [パッチのデザイン] ビューを使って作成されたパッチで、Val0015 警告が ISSelfReg テーブルをチェックするようになりました。QuickPatch またはパッチ プロジェクトで ISSelfReg テーブルが追加された場合、Val0015 はパッチがアンインストール可能であることを警告します。以前、Val0015 はこのテーブルのエントリをチェックしませんでした。

## ビルド時に Setup.exe と ISSetup.dll にストリームされるファイルの圧縮

今回より、Setup.exe セットアップ ランチャまたは ISSetup.dll ファイルを使用するリリースをビルドしたとき、InstallShield によって、ビルド時に Setup.exe ファイルまたは ISSetup.dll ファイルにストリームされるファイルが圧縮されるようになりました。InstallShield が使用するデフォルトの圧縮レベルは、ファイルのサイズと実行時に圧縮ファイルを展開するために必要な時間のバランスをとっての目安です。これは、InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 にアップグレードされた既存の基本の MSI、InstallScript MSI、Web プロジェクトおよび新規の基本の MSI、InstallScript MSI、Web プロジェクトに適用します。

圧縮レベルを変更する場合、または圧縮をしない場合、マシン全体に適用する設定を利用してデフォルトのレベルをオーバーライドすることができます。

以前、InstallShield には、ビルド時に Setup.exe ファイルまたは ISSetup.dll ファイルにストリームされたファイルを圧縮するサポートが含まれていませんでした。このため、InstallShield 2008 以前でビルドされたリリースと InstallShield 2009 のデフォルト圧縮レベルでビルドされた同じリリースを比較したとき、Setup.exe または ISSetup.dll のファイル サイズに若干違いがある場合があります。また、ファイルの展開にかかる時間にも差が生じる場合があります。

## マルチパート .cab ファイル

InstallShield には、今回より、ビルド時にネットワーク イメージ リリースについて作成した各 .cab ファイル (標準圧縮タイプ (カスタム圧縮ではない圧縮) で、かつすべてのファイルが単一ファイルの .msi パッケージまたは Setup.exe セットアップ ランチャに埋め込まれている .cab ファイル) に対して 600 MB がデフォルト制限として設定されています。InstallShield で、この種類のリリースについて .cab ファイルを作成しているとき、この制限に達すると、データが 2 つ以上の .cab ファイルに分割され、マルチパートの .cab ファイルが作成されます。これは、InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 にアップグレードされた既存の基本の MSI、InstallScript MSI、Web プロジェクトおよび新規の基本の MSI、InstallScript MSI、Web プロジェクトに適用します。

.cab サイズの制限は必要に応じて変更することができます。InstallShield でマルチパート .cab ファイルを作成しない場合、単一の .cab ファイルを作成するように構成できます。

以前、InstallShield では、マルチパート .cab ファイルを作成できなかったため、.cab ファイルのサイズのビルトイン制限もありませんでした。

## オートメーション インターフェイスと Standalone Build

InstallShield または Standalone Build のオートメーション インターフェイスまたは Standalone Build を使用する場合、既存のコードを更新して、新しい ProgID (IswiAuto15.ISWiProject) を反映させてください。こ Standalone Build のインターフェイスで、InstallShield と同じ ISWiAutomation15.dll ファイルが使用されるようになりましたが、インストールされる場所は異なります。

Standalone Build を InstallShield と同じマシンにインストールする場合、最後に登録された ISWiAutomation15.dll ファイルが使用されますので注意してください。

InstallShield オートメーション インターフェイスと共に動作する既存のオートメーション スクリプトがある場合、スタンドアロン オートメーション インターフェイスと共に使用するためにスクリプト全体でライブラリの名前を IswiAutoN から SAAutoN (N はバージョン番号です) に変更する作業は必要なくなりました。

InstallShield Premier Edition で提供されている Standalone Build は、InstallShield と同じディレクトリ構造を使用するようになりました。

今回より、InstallShield のコマンドライン ビルドで使われる ISCmdBld.exe も Standalone Build と共にインストールされています。以前、Standalone Build は別のファイル (IsSaBld.exe) をコマンドライン ビルドに使用していました。

## InstallScript プロジェクトにおける FLEXnet Connect のサポート

FLEXnet Connect のサポートをインストール プロジェクトに追加するときに使用する [アップデート通知] ビューが InstallScript プロジェクトで使用できなくなりました。このビューは、基本の MSI と InstallScript MSI プロジェクトで使用できます。

InstallScript プロジェクトにおける FLEXnet Connect のサポートに関する詳細は次の参照してください:

- InstallShield テーブルで ISEnableUpdateService が 1 に変更されたとき、ISUS.obl はライブラリ一覧に追加されません (つまり、他の FLEXnet Connect 機能が有効にされません)。ISUS.obl ライブラリは現在サポートされていません。
- InstallShield プロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 にアップグレードしたとき、FLEXnet Connect のサポートは自動的に無効になりません。また、ISUS.obl もリンクされたスクリプト ライブラリの一覧からも自動的に削除されません。
- FLEXnet Connect の定数と関数はこれまで同様コンパイルされます。ただし、すべての関数は今回より ISERR\_NOT\_IMPLEMENTED を返します (UpdateServiceGetAgentTarget は除きます)。UpdateServiceGetAgentTarget はヌル ("") を返します。
- FLEXnet Connect 用の InstallScript 関数の呼び出しは、すべてデフォルトの InstallScript コードから削除されました。OnUpdateUIBefore イベント ハンドラでは、UpdateServiceOnEnabledStateChange のコードが削除されました。OnMoveData イベント ハンドラでは、UpdateServiceRegisterProduct と UpdateServiceCreateShortcut のコードブ

ロックが削除されました。InstallScript MSI プロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 へアップグレードしたとき、初期のバージョンのプロジェクトでこれらのイベントがオーバーライドされている場合、上記の関数が呼び出されます。これにより、問題が起きることはありません。関数は、現在、ISERR\_NOT\_IMPLEMENTED を返します。また、OnFirstUIAfter イベント ハンドラが更新され、SdFinishUpdate の呼び出すオプションが除かれました。このオプションはデフォルトで無効にされています。

すべての FLEXnet Connect に関する再起動の後に実行される機能が削除されました。このため、製品は、再起動の後、FLEXnet Connect に登録されていません。

- 今回より、InstallScript プロジェクトをビルドしたとき、FLEXnet Connect に関するファイルはメディアに追加されません。
- ISUS.obl は、サポートされなくなるため、製品で提供されなくなります。

## InstallScript MSI プロジェクトにおける FLEXnet Connect のサポート

次の FLEXnet Connect 関連の関数は、InstallScript MSI プロジェクトで使用されなくなりました。

- GetUpdateStatus — この関数は常に FALSE を返します。
- SetUpdateStatus — この関数は ISERR\_NOT\_IMPL を返します。
- GetUpdateStatusReboot — この関数は常に FALSE を返します。
- SetUpdateStatusReboot — この関数は ISERR\_NOT\_IMPL を返します。

SetUpdateStatus と SetUpdateStatusReboot 関数へのすべての呼び出しは、デフォルトの InstallScript コードから削除されました。

## InstallScript における複数インスタンスのサポート

言語の選択ダイアログを表示する複数言語、複数インスタンス InstallScript インストールで、インスタンスの選択ダイアログが言語の選択ダイアログの前に表示されるようになりました。ダイアログの順番が変更されたことにより、エンドユーザーが製品の新しいインスタンスに異なる言語を選択することができるようになりました。インスタンスの選択ダイアログで、エンドユーザーが既存のインスタンスを保持することを指定した場合、言語の選択ダイアログは表示されません。インスタンスの選択ダイアログが表示される時、言語の選択ダイアログが表示される時と同じ言語で表示されます。

非複数インスタンス インストールの複数のインスタンスが、Setup.exe /ig コマンドライン パラメータを通してインストールされた場合、言語の選択ダイアログは初回インストールでのみ表示され、メンテナンス モードでは表示されません。これにより、元のインストールが実行され、その機能がインストールされたときに使用された言語が、元のインストールの修復でも使用されるようになります。また、初回でインストールされず、メンテナンス モードでインストールされた機能を追加するときにも、この言語が使用されます。

サイレント モードまたは Setup.exe -hide\_usd コマンドライン パラメータと共に実行されるインストールなど、インスタンスの選択ダイアログを表示しない InstallScript の完全リリース インストールが実行される時、新しいインスタンスが自動的にインストールされます。この動作は、InstallShield 2009 におけるすべてのプロジェクト、および以前のバージョンから InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクトで発生します。InstallShield 2008 では、/hide\_usd が使用されたとき、初回でインストールされたインスタンスが保持され、サイレント モードが実行されたとき、新しいインスタンスがインストールされていました。InstallShield 12 以前では、初回でインストールされたインスタンスが、/hide\_usd が使用されたときも、また、サイレント モードが実行されたときも保持されていました。

差分メディアでは、読み込まれた初回のインスタンスが更新されます。

Setup.exe /ig または /ig コマンドライン パラメータが使用されてインストールされたインスタンスが 2 つ以上あるシステムで非複数インスタンスが実行されたとき、インスタンスの選択ダイアログが表示されます。非複数インスタンスのインストールでは、新しいインスタンスに対して新しい GUID がランダムに生成されないため、インスタンスの選択ダイアログでは新しいインスタンスをインストールできません。インスタンスの選択ダイアログには、GUID が製品の GUID に一致するインスタンスがインストールされていて、かつ、それがメンテナンス可能なインスタンスの 1 つである場合、それが "デフォルト" のインスタンスとして表示されます。この動作は、InstallShield 2009 におけるすべての新規プロジェクト、および以前のバージョンから InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクトに適用します。

インスタンスが 1 つのみインストールされている場合、インストール済みインスタンスが自動的にメンテナンスされる試みが行われ、インスタンスの選択ダイアログは表示されません。これは、インストールされているインスタンスがデフォルトのインスタンスではない場合も当てはまります。この動作の結果、デフォルトのインスタンスがインストールされていなく、非デフォルトのインスタンスが (/ig パラメータが使用されて) インストールされている場合、デフォルトのインスタンスは、(a) 最初に非デフォルトのインスタンスをアンインストールするか、または、(b) /ig パラメータを使ってデフォルト インスタンスの GUID を指定しないかぎり、インストールまたはメンテナンスできません。したがって、/ig パラメータを使って、複数インスタンスをインストールすることが可能な場合、常にこのパラメータを使用することをお勧めします。この動作は、InstallShield 2009 におけるすべての新規プロジェクト、および以前のバージョンから InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクトに適用します。

InstallShield 2008 では、非複数インスタンスのインストールが、複数のインスタンスがインストールされているターゲット システムで実行された場合、インスタンスの選択ダイアログは表示されませんでした。このようなケースでは、デフォルトのインスタンスが常に使用されていました。InstallShield 12 以前では、非複数インスタンスのインストールが、複数のインスタンスがインストールされているターゲット システムで実行された場合、インスタンスの選択ダイアログは表示されましたが、非複数インスタンスのインストールでは新しいインスタンスに対して新しい GUID がランダムに生成されないため、インスタンスの選択ダイアログでは新しいインスタンスを表示できませんでした。しかしながら、ダイアログのタイトル バーで、エンドユーザーが更新するインスタンスを選択する必要があるというメッセージが表示されていました。エンドユーザーが更新またはメンテナンスを行うインスタンスを選択する必要があるというメッセージが本来表示されるべきでした。

### プロキシ サーバーのサポート

プロキシ サーバーを通してインターネットにアクセスしているエンドユーザーがインストール (またはインストールの再配布可能ファイル) をインターネットからダウンロードするとき、インストール時に、Internet Explorer で構成されているシステム プロキシの設定が使用されます。これは、ターゲット システムで別のブラウザがデフォルト ブラウザとして使用されている場合も含まれます。この動作は、InstallShield 2009 におけるすべてのプロジェクト、および以前のバージョンで作成され、InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクトでも同様です。

InstallShield 2008 以前では、デフォルト ブラウザとして指定されているブラウザで構成されているプロキシ サーバーの設定が使用されていましたが、場合によって失敗し、次のような問題が発生していました:

- Netscape 6 または 7 がデフォルト ブラウザの場合、Netscape 4 の設定が使用される。Netscape 8 または 9 がデフォルト ブラウザの場合、システム (Internet Explorer) の設定が使用される。
- Netscape 4 の設定が使用された場合、プロキシ サーバーの一覧のみが正しく読み込まれ、インポートされる。プロキシ バイパス一覧は読み込まれるが、正しくインポートされない。
- Internet Explorer 4 と互換性がない設定 (例、オートプロキシ スクリプト設定) はインポートされない。
- インストールでデフォルト ブラウザの判別に使用する方法が Windows Vista と互換性がない。このため、Windows Vista で、デフォルト ブラウザが正しく判別されない可能性があった。

### Windows Mobile デバイス用インストールのロールバック サポート

InstallShield は今回より、デスクトップからデバイスへのインストールに含まれる Windows Mobile 搭載デバイス用のインストールのロールバックが適切な場合、これをサポートします。このサポートには、RollbackCEApps と呼ばれるビルトイン InstallShield カスタム アクションが使用されます。

この新しいカスタム アクションを使うと、エンドユーザーが Windows Mobile 搭載デバイスに製品をインストール中に [キャンセル] ボタンをクリックしたとき、インストールがロールバックし、関連 .ini ファイル、.cah ファイル、および .ico ファイルのすべてがターゲット マシンから削除されます。

InstallShield 2009 を使って、新しい基本の MSI、InstallScript MSI、または Web プロジェクトの [モバイル デバイス] ビューで Windows Mobile 搭載デバイス用のインストールを追加すると、プロジェクトに RollbackCEApps カスタム アクションが自動的に追加されます。

[モバイル デバイス] ビューに Windows Mobile 搭載デバイス用のインストーラーが既に含まれている基本の MSI、InstallScript MSI、または Web プロジェクトを InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 にアップグレードした場合にも、このカスタム アクションが追加されます。

### 基本の MSI、InstallScript MSI および Web プロジェクトでの Windows Mobile サポートの変更

Windows Mobile 搭載デバイスのインストーラーを含む基本の MSI、InstallScript MSI、および Web インストーラーについて、Windows Vista システム上で昇格された権限を使ってインストーラーを起動する必要がなくなりました。昇格された権限は [実行] シーケンスでのみ必要となります。

これまで、リリースの [Setup.exe] タブで "必要実行レベル" を [管理者] オプションに設定してこの問題を回避していた場合は、今後 [起動者] に設定することができます。

### SetARPINSTALLLOCATION カスタム アクションのデフォルト条件

デフォルトで、すべての新しい基本の MSI、InstallScript MSI および Web プロジェクトには、ビルトイン InstallShield カスタム アクション SetARPINSTALLLOCATION が含まれています。このカスタム アクション (ARPINSTALLLOCATION プロパティの値を製品のプライマリ フォルダの完全修飾パスに設定します) は、[インストール]-[実行] シーケンスにシーケンスされ、条件を持ちません。InstallShield 2008 以前では、このカスタム アクションのデフォルト条件は Not Installed でした。デフォルトの [Not Installed] 条件を使用すると、カスタム アクションはメンテナンス モード中に実行されず、その結果 ARPINSTALLLOCATION プロパティの値が空白になります。InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 へアップグレードしたプロジェクトでこの動作を回避するには、[カスタム アクションとシーケンス] ビューを開いて、このカスタム アクションの "インストール実行条件" 設定から Not Installed 値を削除します。

### MigrateFeatureStates アクションの新しいシーケンスの場所

デフォルトで、すべての新しい基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトで、MigrateFeatureStates アクションは CostFinalize アクションのすぐあとにシーケンスされるようになりました。[SQL スクリプト] ビューを使って、SQL サポートを新しいプロジェクトに追加すると、InstallShield ビルトイン カスタム アクション ISSQLServerFilteredList は、今回より、MigrateFeatureStates アクションのすぐあとにスケジュールされます。InstallScript 2008 以前では、ISSQLServerFilteredList は MigrateFeatureStates アクションの前にシーケンスされていたため、ランタイム エラー 2601 が発生していました。InstallShield 2008 以前から InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクトでこのエラーを回避するには、[カスタム アクションとシーケンス] ビューを開いて、[インストール] - [ユーザー インターフェイス] シーケンスで ISSQLServerFilteredList アクションを MigrateFeatureStates の後に移動します。

### "テンプレートの概要" プロパティの変更

[一般情報] ビューの [概要情報ストリーム] 領域、または [リリース] ビューの製品構成で "テンプレートの概要" プロパティの値を指定できます。たとえば、複数のプラットフォームまたは複数のセミコロンを使用するなど、無効な値を入力しようとすると、InstallShield は警告メッセージ ボックスを表示して、プロパティ値の変更を阻止します。

InstallShield の以前のバージョンでは、無効な値を入力することが可能でした。InstallShield 2008 以前のプロジェクトを InstallShield 2009 にアップグレードした場合に、無効な値が自動的に変更されることはありませんが、必要に応じて、値を手動で更新することができます。

### 1.x .msi パッケージを .cab ファイルにラップするための Web ダウンローダー オプションの削除

InstallShield では、.msi パッケージを .cab ファイルにラップできるオプションが使用できなくなりました。以前このオプションは、Windows Installer 1.1 または 1.2 を含む基本の MSI、InstallScript MSI、および Web プロジェクトの Web ダウンローダー メディア タイプで使用できました。Windows Installer 2.0 以降を使って、パッケージにデジタル署名を施すことが推奨されます。

### InstallScript MSI プロジェクトにおける状態テキスト

InstallScript MSI プロジェクトの OnFirstUIBefore、OnMaintUIBefore、OnAdminInstallUIBefore、OnAdminPatchUIBefore、OnPatchUIBefore、OnUninstall、および OnResumeUIBefore イベント ハンドラには、デフォルト

トで、すべての新しい InstallScript MSI プロジェクトに `SetStatusExStaticText` の呼び出しを含めます。この新しいデフォルトのコードは `STATUSEX` ダイアログの状態テキストを設定します。今回より、表示される状態テキストは、実行中の操作の種類 (初回インストール、メンテナンス、アンインストール、修復など) に適しています。以前、`SetStatusExStaticText` の呼び出しを手動で追加する必要があり、追加しなかったとき、表示された状態テキストは、実行中の操作に対応していませんでした。

InstallScript MSI プロジェクトを InstallShield 2008 以前から ヘアアップグレードしたとき、初期のバージョンのプロジェクトで 1 つ以上の更新されたイベントがオーバーライドされている場合、`SetStatusExStaticText` コードを手動でこれらのイベントに追加する必要があります。

### InstallScript 関数 `FeatureFileEnum` における動作の変更

InstallScript 関数 `FeatureFileEnum` の `szQuery` パラメータで疑問符 (?) をワイルドカード文字として使用すると、その関数で疑問符が正確に 1 文字分の代替として使用されるようになりました。以前のバージョンの InstallShield で作成したプロジェクトで、`FeatureFileEnum` に疑問符をワイルドカード文字として使用している場合、InstallShield 2009 にアップグレードする際、InstallScript コードを修正する必要がある可能性があります。以前のバージョンの InstallShield では、関数で疑問符は 1 文字または 0 文字の代替として使用されていました。

たとえば、新しい InstallScript プロジェクトをデフォルトの設定で作成して、次の InstallScript コードをプロジェクトに追加すると、実行時に表示されるダイアログでは、何も表示されません。

```
#include "ifx.h"

LIST listFiles;

program

    listFiles = ListCreate (STRINGLIST);
    FeatureFileEnum( MEDIA, "DefaultFeature", "Default?Component", listFiles,
NO_SUBDIR );
    SdShowInfoList( "", "", listFiles );

endprogram
```

以前のバージョンの InstallShield で作成されたインストールでは、`DefaultComponent` がダイアログで表示されていました。

### InstallScript 変数 `SHELL_OBJECT_FOLDER` の変更点

[ショートカット] ビューにあるフォルダの "表示名" 設定で `SHELL_OBJECT_FOLDER` (InstallScript または InstallScript MSI プロジェクトの場合) または `<SHELL_OBJECT_FOLDER>` (InstallScript プロジェクトの場合) を指定できます。その後、ショートカットが作成される前にスクリプトで `SHELL_OBJECT_FOLDER` 変数を設定することにより、このフォルダの表示名を実行時に定義することができます。通常、ショートカットはファイルの転送時に作成されます。

InstallScript MSI インストールでこの機能を使用する場合、[ショートカット] ビューに表示されるフォルダの "キー名" 設定で指定される文字は、すべて大文字でなくてはなりません (例、`NEWFOLDER1`)。

`SHELL_OBJECT_FOLDER` は、初期化中に `IFX_PRODUCT_NAME` と同じ値に初期化されるようになりました。これらの変数は、一旦初期化が完了すると同期されません。したがって、片方の変数を変更してから、もう片方の変数も変更する必要がある場合、両方とも手動で変更しなければなりません。

この変更の一環として、InstallScript MSI プロジェクトでデフォルトの `OnFirstUIBefore` イベント ハンドラ コードに

```
SHELL_OBJECT_FOLDER = @PRODUCT_NAME
```

行が含まれなくなりました。InstallShield 2008 以前で作成された InstallScript MSI プロジェクトでデフォルトの

`OnFirstUIBefore` コードを変更している場合、プロジェクトを InstallShield 2009 にアップグレードしたときに、このコードは自動的に削除されません。

### すべての InstallScript インストールで更新 UI の表示が可能

すべての InstallScript プロジェクトで、更新ユーザー インターフェイス (UI) の表示が可能になりました。以前、更新 UI を無効にすることができる紛らわしいオプションが [一般情報] ビューと [プロジェクトの設定] ダイアログ ボックスで提供されていました。アップデート UI が無効化されたとき、MEDIA\_FLAG\_UPDATEMODE\_SUPPORTED フラグが MEDIA\_FIELD\_MEDIA\_FLAGS に設定されず、適切な時に OnSetUpdateMode イベント ハンドラが UPDATEMODE 変数を設定しませんでした。この結果、更新 UI が表示されませんでした。

今回より、InstallShield テーブルで ISShowUpdateUI の値 (以前のオプションによって更新されていました) を変更しても、影響は出ません。

以前と同じ機能は、以下の方法で複製することができます:

- OnSetUpdateMode イベントをオーバーライドして、UPDATEMODE 変数を設定する前に関数が戻るように更新する。インストールで、更新 UI は表示されません。
- OnUpdateUIAfter イベントをオーバーライドして、FeatureRemoveAllInMediaAndLog の呼び出しを FeatureRemoveAllInMedia の呼び出しに変更する。

## Visual Studio の統合

Microsoft Visual Studio の統合は 1 回につき、InstallShield Premier Edition または InstallShield Professional Edition のいずれかの 1 バージョンとのみ可能です。システムで最後にインストールまたは修復された InstallShield のバージョンが Visual Studio の統合に使用されます。

## Certified for Windows Vista 検証スイートの変更

インストールまたはマージ モジュールが Windows Vista ロゴ プログラムの要件を満たしているかどうかを判別するときに使用する 2 つの Certified for Windows Vista 検証スイートが改訂されました。これらのスイートは今回より InstallShield ICE (ISICE) のみで構成されています。マイクロソフトが作成した ICE (ICE01 ~ ICE99) は、インストール パッケージの完全 MSI 検証ツールおよびマージ モジュールのマージ モジュール検証スイートで提供されているため、取り除かれました。

また、両スイートの名前も変更されました。

- Certified for Windows Vista 検証スイート (および InstallShield ICE) は InstallShield Certified for Windows Vista 検証スイートに変わりました。
- Certified for Windows Vista Merge Module 検証スイート (および InstallShield ICE) は InstallShield Certified for Windows Vista Merge Module 検証スイートに変わりました。

## 削除されたウェルカム アシスタント

InstallShield を初めて開いたときに表示されていたウェルカム アシスタントは今回より含まれていません。

## InstallShield MSIPackageDiff から InstallShield MSI Diff への変更

今回より、InstallShield に InstallShield MSIPackageDiff ツールは含まれていません。これは、より堅牢な InstallShield MSI Diff と呼ばれるツールに変更されました。InstallShield MSI Diff は、InstallShield 内部から起動できます。[ツール] メニューで [差分] をポイントしてから、[InstallShield MSI Diff] をクリックします。

## バグ修正

### 1-11IUSD

[インターネット インフォメーション サービス] ビューを使って、ディレクトリ参照機能が有効な仮想ディレクトリを作成する場合、実行時にインストールが作成するディレクトリが、サイズ、日付、時刻などの属性を表示できるようになりました。以前、一部の IIS で属性は表示されませんでした。

### 1-14WG99 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

InstallShield ビルド プロセスでマージ モジュールをインストールにマージ中に発生した競合とエラーが、ログ ファイルにログ 記録されるようになりました。これらの競合とエラーは、ログ機能が詳細コマンドライン パラメータと共に使用されているときのみログに表示されます。

### 1-15ET2I (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

([一般情報] ビューの [プロジェクトのプロパティ] 領域にある) "セットアップ言語" 設定で [日本語] チェック ボックスを 2、3 回続けて選択およびチェックしたとき、不明のエラーが発生していた問題は今回修正されました。

### 1-16NHBU

[ダイアログ エディタ] ビューを利用して、多数の Registry テーブル エントリを含むプロジェクトの Registry テーブルを表示したとき、InstallShield が応答しなくなる問題は今回修正されました。

### 1-D4L73 (基本の MSI、Web)

イタリア語バージョンのセットアップの初期化ダイアログが実行時に表示されるとき、"インストールの準備中" 文字列が完全に翻訳されて表示されます。以前、一部の文字列が表示されませんでした。

### 1-D9INJ (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

リリースの構成時に以前のパッケージを指定して、InstallShield のパッチの最適化機能を利用するとき、ファイル名とファイルのシーケンス番号が同期されるようになりました。以前、同期が実行されなかったため、場合によって、パッチが適用されたとき、エラー 1334 が発生することがありました。

### 1-DI0X0 (基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、Web)

InstallScript エディタで "言語キーワードの入力中に大文字と小文字を修正する" オプションが選択されているとき、キーワードの大文字と小文字が間違っただけで変更されていた問題は今回修正されました。以前、*export* から *EXPORT* に変更されるなど、キーワードが間違っただけで変更されていました。この問題により、基本の MSI プロジェクトと InstallScript MSI プロジェクトで、エクスポートされた InstallScript カスタム アクションがカスタム アクション ウィザードで提供されないという問題が発生していました。

### 1-ID9SD (マージ モジュール)

複数言語マージ モジュール プロジェクトの [英語] 文字列テーブルに、英語の文字列が適切に含まれています。以前、あるシナリオで、異なる言語からの文字列が含まれることがありました。

### 1-J2839

Visual Studio から InstallShield を使用していて、InstallScript ビューでカーソルが InstallScript 関数内にあるときに F1 キーを押すと、InstallShield ヘルプ ライブラリで適切なヘルプ トピックが表示されるようになりました。以前、Visual Studio ヘルプが表示されていました。

### 1-J3VQH (基本の MSI、Web)

複数言語のインストールがメンテナンス モードで実行されたとき、言語の選択ダイアログが表示されなくなりました。

### 1-YIYRD、IOC-000061109 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

The product version, the product name, and the file version that are displayed in the Properties dialog Setup.exe セットアップの [プロパティ] ダイアログで製品バージョン、製品名、ファイルバージョンが切断されて表示されていた問題は今回修正されました。

### 1-YLH6X、IOC-000065692 (基本の MSI、Web)

dllwrap.dll ファイル (Windows Installer DLL カスタム アクションを含む基本の MSI と Web プロジェクトに追加される標準 DLL ラッパー) が、Binary テーブルに即時カスタム アクションと遅延カスタム アクションの両方が格納されているインストールにおいて MSI デバッグ問題を引き起こしていた問題が、解決されました。ビルトイン InstallShield カスタム アクションの



DllWrapStartup が、遅延アクションの Binary テーブル DLL ファイルを一時保管場所に抽出した後、即時アクションが同じ DLL ファイルを同じ一時保管場所に抽出しますが、異なる一時ファイル名が使用されます。即時アクションが完了したとき、一時ファイル名が付けられた DLL ファイルが一時保管場所から削除されます。その後、遅延アクションが起動したとき、遅延アクション DLL ファイルが一時保管場所に残っているため、MSI デバッガが DLL が見つからないことを示すエラーメッセージを表示することはありません。

以前は、カスタムアクション DllWrapStartup が遅延アクションの Binary テーブル DLL ファイルを一時保管場所に抽出した後、即時アクションが同じ DLL ファイルを同じ一時保管場所へ同じファイル名で抽出していました。即時アクションが完了したときに DLL ファイルが一時保管場所から削除されたために、遅延アクションが同じ DLL を使用することができませんでした。その結果、MSI デバッガによって DLL が見つからないことを示すエラーメッセージが表示されました。

### IOA-00006049 (InstallScript MSI)

InstallScript MSI プロジェクトの OnFirstUIBefore、OnMaintUIBefore、OnAdminInstallUIBefore、OnAdminPatchUIBefore、OnPatchUIBefore、OnUninstall、および OnResumeUIBefore イベントハンドラには、デフォルトで、すべての新しい InstallScript MSI プロジェクトに SetStatusExStaticText の呼び出しを含めます。この新しいデフォルトのコードは STATUS\_EX ダイアログの状態テキストを設定します。今回より、表示される状態テキストは、実行中の操作の種類(初回インストール、メンテナンス、アンインストール、修復など)に適しています。以前、SetStatusExStaticText の呼び出しを手動で追加する必要があり、追加しなかったとき、表示された状態テキストは、実行中の操作に対応していませんでした。

InstallScript MSI プロジェクトを InstallShield 2008 以前からへアップグレードしたとき、初期のバージョンのプロジェクトで 1 つ以上の更新されたイベントがオーバーライドされている場合、SetStatusExStaticText コードを手動でこれらのイベントに追加する必要があります。

### IOA-000024622 (InstallScript)

エンドユーザーが 2 GB を超えるサイズの InstallScript 自己展開型圧縮 Setup.exe ファイルを実行した場合に、インストールがクラッシュする問題は解決されました。

### IOA-000026080 (マージ モジュール)

COM 抽出がマージ モジュール プロジェクト内にある DLL に対して実行され、DLL の COM データが変更されてから、COM データをリフレッシュしたとき、今回から新しい無効の Directory テーブル エントリが生成されなくなりました。以前、COM データをリフレッシュしたとき、新しい無効の Directory テーブル エントリが生成されていました。

### IOA-000026270 (基本の MSI、Web)

インストールが [実行] シーケンスにあるときに、エンドユーザーによって [キャンセル] ボタンがクリックされた場合、確認のメッセージ ボックスが表示されます。エンドユーザーが [はい] をクリックしたとき、インストールが中止されます。以前、インストールはそのまま続行していました。

### IOA-000028094

オートメーション インターフェイスを使って、アップグレード コードを変更したときに、ビルトイン カスタム アクション ISSetAllUsers が削除される問題が解決されました。

### IOA-000028975 (InstallScript、InstallScript MSI)

InstallScript または InstallScript MSI インストールが Windows Vista システムで特定の条件下で実行されたとき、ボリューム シャドウ コピー サービス (VSS) エラーがイベント ビュアのアプリケーション ログにログされていましたが、この問題は今回解決されました。

### IOA-000029567

.NET Framework をインストールするインストールの実行中、Windows Vista システムでプログラム互換性ダイアログが表示されていた問題は今回修正されました。

## IOA-000029813

前提条件のファイルがシステムにインストールされていない状態で、InstallShield 前提条件がプロジェクトに追加されたとき、ファイルをダウンロードするかどうかをたずねるプロンプトが表示されます。以前、このプロンプトは表示されませんでした。

## IOA-000031885 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

[リリース] ビューの製品構成の "MSI パッケージ ファイル名" 設定によって .msi ファイルの名前が上書きされていて、指定された .msi ファイルの名前が ProductName.msi と異なるときに、最新のセットアップ パスを <ISLatestRelease> とするパッチ構成の [バッチのデザイン] ビューでバッチのビルドを試みた場合に、ビルド エラー -6431 が発生することなくなりました。

## IOA-000032803 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

モバイル デバイス インストールに含まれているファイルの "読み取り専用" 属性が、リリースのビルド中に変更されなくなりました。以前、読み取り専用ファイルがモバイル デバイス インストールに含まれている場合、リリースをビルドしたとき、属性が書き込み可能に変わっていました。

## IOA-000032831 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

Val0009 が特定の RemoveRegistry を見逃すことはなく、また無効な警告を表示することもなくなりました。

## IOA-000033589 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

基本の MSI または InstallScript MSI プロジェクトにマージ モジュールを追加して、[カスタム アクションとシーケンス] ビューでマージ モジュールのアクションの 1 つをシーケンスに挿入したとき、そのアクションの設定が右のペインに表示されます。以前、設定が表示されませんでした。

## IOA-000033807 (基本の MSI、Web)

プロジェクトの ControlEvent テーブルの Argument 列がカスタム ディレクトリを参照したときに、[リリース] ビューの "未使用のディレクトリを保持する" 設定が [いいえ] になっている場合、Windows Installer エラー 2727 が発生していましたが、この問題は今回解決されました。

## IOA-000036942 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

InstallShield でビルドされた .msi パッケージの Patch テーブルから StreamRef\_ column が欠落していた問題は解決されました。

## IOA-000038962 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

ProgID テーブルで単一引用符が使用されたとき、エラー -6006 が発生していた問題が今回修正されました。

## IOC-000050626

今回より、Setup.exe /s パラメータを利用して、InstallShield 前提条件を含む基本の MSI、InstallScript MSI、または Web インストールを起動したとき、前提条件が自動的にサイレントで実行されなくなったこと、および、InstallShield 前提条件エディタで InstallShield 前提条件に対して有効なサイレント コマンドライン パラメータを指定する必要がある場合によってあることがドキュメントで説明されています。

## IOB-000051257 (基本の MSI、Web)

DatabaseFolder ダイアログをプロジェクトに追加したとき、デフォルトのパスが実行時にこのダイアログで表示されなかった問題が今回修正されました。また、エンドユーザーがこのダイアログで [参照] ボタンをクリックしたときも、エラーが発生しなくなりました。以前、実行時に、デフォルトのパスがこのダイアログで表示されませんでした。また、[参照] ボタンをクリックしたとき、「デフォルトのインストール先がありません」というエラー メッセージが表示されていました。

## IOC-000051284

プロジェクト (.ism) を InstallShield 11.5 またはそれ以前のレガシー プロジェクトとして保存すると発生していた 2814 ランタイム エラーが解決されました。

### IOC-000051467 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

%ComputerName% などの環境変数が [XML ファイルの変更] ビューで構成された XML ファイルのインストール先に使用されたとき、インストールパスの環境変数が正しく解決され、XML ファイルが適切な場所にインストールされるようになりました。以前、パスの環境変数は解決されず、XML ファイルは、値ではなく、環境変数の名前を含むパスにインストールされていました。

### IOC-000052309 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

SQL ランタイムが、今回より、データベース サーバーからの情報メッセージ (たとえば、PRINT ステートメントの出力など) を Windows Installer 詳細出力ログに書き込むようになりました。

### IOC-000054510

今回より、InstallShield で、32 文字以上の同じ名前プレフィックスを共有する複数のプロジェクトについてプロジェクトグループ出力を作成できるようになりました。以前、同じプレフィックスを持つ 2 つ目以降のプロジェクトは、参照することができませんでした。

### IOC-000056149

特定の状況下で、COM データを抽出したとき、Name 列にアスタリスク (\*) がある Registry テーブルが作成されていた問題は今回解決されました。このアスタリスクによって、関連付けられているコンポーネントのアンインストール中に、該当するレジストリ キーが、すべての値とサブキーと共に、アンインストールされていました。

### IOC-000056814 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

[一般情報] ビューで "発行元" 設定を空白のままにすると、今回よりエラーが表示されます。以前、この設定を空白のままにしておいても、エラーが発生しませんでした。"発行元" 設定を空にしたままリリースに QuickPatch を作成すると失敗に終わります。

### IOC-000058816 (InstallScript)

すべての InstallScript プロジェクトで、更新ユーザー インターフェイス (UI) の表示が可能になりました。以前、更新 UI を無効にすることができる紛らわしいオプションが [一般情報] ビューと [プロジェクトの設定] ダイアログ ボックスで提供されていました。アップデート UI が無効化されたとき、MEDIA\_FLAG\_UPDATEMODE\_SUPPORTED フラグが MEDIA\_FIELD\_MEDIA\_FLAGS に設定されず、適切な時に OnSetUpdateMode イベント ハンドラが UPDATEMODE 変数を設定しませんでした。この結果、更新 UI が表示されませんでした。

今回より、InstallShield テーブルで ISShowUpdateUI の値 (以前のオプションによって更新されていました) を変更しても、影響は出ません。

以前と同じ機能は、以下の方法で複製することができます:

- OnSetUpdateMode イベントをオーバーライドして、UPDATEMODE 変数を設定する前に関数が戻るように更新する。インストールで、更新 UI は表示されません。
- OnUpdateUIAfter イベントをオーバーライドして、FeatureRemoveAllInMediaAndLog の呼び出しを FeatureRemoveAllInMedia の呼び出しに変更する。

### IOC-000058827 (InstallScript MSI)

管理 (Setup.exe /a) インストールで、InstallScript 機能のイベントが InstallScript MSI プロジェクトで呼び出されなくなりました。

### IOC-000059544 (基本の MSI、InstallScript、スマート デバイス、Web)

スマート デバイス セットアップ ウィザードまたは Windows Mobile ウィザードの .NET Compact Framework パネルでオプションを 1 つ以上選択したとき、[詳細] ボタンが有効になります。このボタンをクリックすると、[ターゲットデバイス] ダイアログ ボックスが開き、選択した再配布可能ファイルを必要とするターゲット プロセッサとプラットフォームを指定することができます。今回より "Windows CE .NET 5.0, ARMV4" もオプションに追加されました。以前、このオプションがありませんでした。

## IOC-000059607

[リリース] ビュー内にあるリリースの [署名] タブにあるデジタル署名ファイル (.pfx ファイルまたは .pvk ファイルがある .spc ファイル) を指定すると、ショートカットの Icon テーブルにあるすべてのファイルにデジタル署名が行われます。 InstallShield はアイコンを実行可能ファイルから抽出して、Icon テーブルに格納します。

## IOC-000059715、IOC-000061070 (基本の MSI、InstallScript MSI、QuickPatch、Web)

Update.exe ランチャを使用するパッチをビルドすると、アップグレードされたイメージの Setup.exe ファイルに使用された Update.exe ファイルのマニフェストが存在する場合、同じマニフェストが使用されます。以前、InstallShield は常に要求された実行レベルとして asInvoker を使った Update.exe マニフェストを構成していました。

同様に、Update.exe ランチャを使用する QuickPatch パッケージをビルドすると、アップグレードされたイメージの Setup.exe ファイルに使用された Update.exe ファイルのマニフェストが存在する場合、同じマニフェストが使用されます。以前、InstallShield は常に要求された実行レベルとして asInvoker を使った Update.exe マニフェストを構成していました。

## IOC-000060149

今回より、ODBC から戻されたサーバー名を含む文字列が 4,852 文字を超えるときも、SQLBrowse ダイアログでリモート サーバーが表示されます。

## IOC-000060428 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

[設定] ダイアログ ボックスの [MSI ログ ファイル] タブにある [ログ ファイル] ボックス (InstallShield の [ビルド] メニューにあります) にスペースを含むパスを入力した場合でも、InstallShield 内でインストールを起動したときにログ ファイルへのパスが正しく渡されます。

## IOC-000060502 (マージ モジュール)

Condition テーブルのエントリについて、マージ モジュールがマージされたとき、そのモジュールの親機能に機能条件を配置するように作成した場合 (Windows Installer ヘルプの「Referencing Features in Merge Modules」ヘルプ トピックを参照)、ビルドされたモジュールに Condition テーブルが含まれるようになりました。

## IOC-000060706、IOC-000069260

今回より、プロジェクトに含まれる異なるリリースの [ポストビルド] タブにある "フォルダにコピー" 設定で、異なるフォルダの場所を指定できるようになりました。以前、1 つのリリースでフォルダの場所を変更すると、プロジェクトに含まれるすべてのリリースで新しいパスが表示されていました。

また、異なるリリースの "FTP ロケーション" 設定で異なる FTP ロケーションを指定することもできます。以前、1 つのリリースでフォルダの場所を変更すると、プロジェクトに含まれるすべてのリリースで新しいパスが表示されていました。

## IOC-000060739

InstallShield のシリアル番号の検証が既に行なわれているにもかかわらず、ISCmdBld.exe コマンドライン ビルド ツールを使ってリリースをビルドしたとき、作成されたインストールで、「このインストールは InstallShield の評価版で作成されています。」というランタイム メッセージが表示されていた問題は今回修正されました。

この問題は、InstallShield 2008 のライセンス ホットフィックスでも解決されています。

## IOC-000060838 (InstallScript MSI)

InstallShield が Visual Studio 2005 SP1 内から開かれたとき、InstallScript MSI プロジェクトで [プロパティ マネージャ] ビューと [パス変数] ビューが表示されなかった問題は今回修正されました。

## IOC-000060848 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

インストールに IIS 仮想ディレクトリとネスト仮想サブディレクトリが含まれる場合、今回よりネスト仮想サブディレクトリは、実行時に親の仮想ディレクトリが作成されてから作成されるようになりました。各仮想ディレクトリとサブディレクトリは、その

表示名のアルファベット順に作成されるようになりました。これにより、VirtualDirectory1 は、ネストされた仮想サブディレクトリ VirtualDirectory1/VirtualSubDirectory が作成される前に作成されます。その後、VirtualDirectory2 が作成され、最後にネストされた仮想サブディレクトリ VirtualDirectory2/VirtualSubDirectory が作成されます。

以前、インストールは仮想ディレクトリとサブディレクトリを、対応するコンポーネント名のアルファベット順に作成していました。したがって一部の状況において、インストールが実行されたとき、仮想サブディレクトリのインストールが、その親となる仮想ディレクトリのインストールの前に試みられることがありました。これにより、次のランタイムエラーが発生していました：

1: エラー: OpenKey が

/LM/W3SVC/1/Root/DisplayName7\DisplayName8\DisplayName9\DisplayName10\DisplayName11 で失敗しました。

HRESULT = HRESULT\_FROM\_WIN32(ERROR\_PATH\_NOT\_FOUND)

1: IISRT のエラー: -2147024893. 変換エラー: システムで指定されたパスが見つかりません。

### IOC-000060877

言語固有の文字を含む言語固有のマージ モジュールが、言語固有文字と同じコード ページを持つ単一言語インストールに組み込まれたとき、それらの文字がそのままの形でマージされるようになりました。以前、言語固有の文字が、一番近いニュートラル言語の対応する文字列に変換されていました。

### IOC-000060912 (基本の MSI、マージ モジュール、Web)

プロジェクトの DIM リファレンスに "Windows Vista 以降" (条件が最小バージョンの Windows およびそれ以降のバージョンに適用します) などのレジストリ条件が含まれているとき、InstallShield でコンポーネント条件が正しく作成されていなかった問題は今回修正されました。以前、条件の "以降" の部分が無視され、間違った条件 (WindowsNT>=600 条件ではなく WindowsNT=600 など) が作成されていました。

### IOC-000060948、IOC-000065332 (基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、InstallScript オブジェクト、マージ モジュール、Web)

ISCmdBld.exe または Standalone Build で -I コマンドライン パラメータを使用すると、今回より、InstallScript プロジェクトでパス変数の値がオーバーライドされるようになりました。以前、-I オプションと PathVariables パラメータのどちらを使用しても、InstallScript プロジェクトでパス変数の値が変更されませんでした。

-I コマンドライン パラメータを使って、ダイナミックにリンクされたフォルダ内のファイルのパス変数の値をオーバーライドすることができます。以前、-I オプションを使ってもパス変数の値は変更されませんでした。

### IOC-000060950 (QuickPatch)

QuickPatch プロジェクトの [一般情報] ビューにある [カスタム アクション] 領域で、今回よりカスタム アクションに格納されている VBScript コードを実行するカスタム アクションが一覧表示されるようになりました。以前、このタイプのカスタム アクションは表示されなかったため、QuickPatch が適用されるときに実行されないようにチェック ボックスをクリアすることはできませんでした。

### IOC-000060982 (基本の MSI、InstallScript MSI、スマート デバイス、Web)

スマート デバイス セットアップ ウィザードと Windows Mobile ウィザードの実行中、.inf ファイルでファイルの関連付けが正しく生成されるようになりました。以前、.inf ファイルのファイルの関連付けで引用符が使用されていませんでした。このため、関連付けられているファイル拡張子を持つ文書名に空白があったとき、アプリケーションでそれを開くことができませんでした。

### IOC-000060994 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

マージ モジュールをローカル リポジトリにパブリッシュしたとき、その時開いている基本の MSI または InstallScript MSI プロジェクトの中のすべてのマージ モジュールがすべて削除されていた問題は今回修正されました。

### IOC-000061047 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

ビルトイン InstallShield カスタム アクション SetARPINSTALLLOCATION の Not Installed 条件が削除されました。この変更は、すべての新しい基本の MSI および InstallScript MSI プロジェクトに影響します。この変更は、このカスタム アクション

がメンテナンス操作中に実行されていないとき、ARPINSTALLLOCATION プロパティの値が、製品のプライマリ フォルダの完全修飾パスではなく、空白が入るために加えられました。

### **IOC-000061057 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

今回より、"Web からダウンロード" タイプのインストーラと "ソース メディアからコピー" タイプのインストーラと同じ .NET Framework 2.0 言語がインストールされます。

### **IOC-000061058 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

すべての基本の MSI と InstallScript MSI プロジェクトで、MigrateFeatureStates アクションは CostFinalize アクションのあとにシーケンスされるようになりました。また、今回より、基本の MSI または InstallScript MSI プロジェクトに [SQL スクリプト] ビューで構成された SQL サポートが含まれている場合、ビルトイン InstallShield カスタム アクション ISSQLServerFilteredList は MigrateFeatureStates アクションのあとにシーケンスされます。以前、ISSQLServerFilteredList は MigrateFeatureStates アクションの前にシーケンスされていたため、エラー 2601 (無効な値エラー) が発生していました。これらの変更は、すべての新しい基本の MSI および InstallScript MSI プロジェクトに影響します。

### **IOC-000061097**

[リリース] ビュー内にあるリリースの [署名] タブにあるデジタル署名ファイル (.pfx ファイルまたは .pvk ファイルがある .spc ファイル) を指定すると、Icon テーブルにあるショートカット用および製品の [プログラムの追加と削除] エントリ用のすべてのファイルにデジタル署名が行われます。InstallShield はアイコンを実行可能ファイルから抽出して、Icon テーブルに格納します。

### **IOC-000061229 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

今回より、リリースをビルドしたとき、インストーラ クラス カスタム アクションに同一のプライマリ キーが生成されます。以前、ビルドが実行されるごとに、インストーラ クラス カスタム アクションに異なるプライマリ キーが生成され、これにより、パッチで問題が生じることがありました。

### **IOC-000061684 (基本の MSI、Web)**

今回より、DIM 内のファイルに対してアドバタイズ済みのショートカットを作成できます。以前、DIM ファイルのショートカットの "アドバタイズ" 設定で [はい] を選択した場合、ショートカットが .msi ファイルの Shortcut テーブルに追加されていませんでした。このため、アドバタイズ済みのショートカットが実行時に作成されませんでした。

### **IOC-000061918 (トランスフォーム)**

InstallShield で作成されたトランスフォームの \_Validation タブに間違っただータが含まれていた問題は今回修正されました。トランスフォームが適用されたとき、エラー抑制ビットが無視された場合、この間違っただータによってエラーが発生していました。

### **IOC-000061924 (基本の MSI、Web)**

文字列テーブルのテキストをダイアログのテキスト ボックス コントロールに追加すると、文字列テーブルのエントリではなくテキスト ボックス コントロールの文字列 ID が表示されていた問題は、今回解決されました。

### **IOC-000062043 (基本の MSI、Web)**

InstallShield で、.exe ファイルのショートカットのアイコンに .ico ファイルを選択したとき、.ico ファイルからアイコンが抽出され、Icon テーブルに .exe ファイルとして追加されます。以前、.ico ファイルの名前が .exe ファイル拡張子を使って変更され、そのファイルが Icon テーブルに追加されていました。

### **IOC-000062306**

FLEXnet Publisher Licensing 11 を使用するソフトウェアがあるシステムに InstallShield をインストールしたとき、ソフトウェアが動作しなくなる場合があります。以前、ユーザーが試行でアドビ ソフトウェアを起動したとき、エラー "Licensing for this product has stopped working" が表示されていました。

この問題は、InstallShield 2008 のライセンス ホットフィックスでも解決されています。

### **IOC-000062373**

XML 設定のインポートウィザードを使って XML ファイルを複数言語プロジェクトにインポートしたとき、デフォルト以外の言語にも XPath 式が正しく作成されるようになりました。以前、XPath 式をデフォルト言語からその他の言語に手動でコピーする必要がありました。

### **IOC-000062443 (マージ モジュール)**

64 ビット レジストリ システム検索を使用するマージ モジュールについて検証を実行したとき、エラー ICE03 が発生しなくなりました。

### **IOC-000062532 (QuickPatch)**

InstallShield は、特定の条件 (QuickPatch の作成で使われたアップグレード済みの .msi ファイルに ISSelfReg テーブルが存在し、ISSelfRegisterFiles カスタムアクションが実行シーケンスに含まれていて、InstallShield の [オプション] ダイアログの [プリファレンス] タブで ISSelfReg オプションが選択されている場合) のすべてが当てはまる場合、QuickPatch プロジェクトで自己登録にマークされている新しい COM サーバーには、InstallShield 自己登録 (ISSelfReg テーブル) を使用します。前述の条件のうち、1 つでも当てはまらない場合、InstallShield は Windows Installer 自己登録 (SelfReg テーブル) を使用します。以前、QuickPatch プロジェクトはすべての条件下で Windows Installer 自己登録を使用していました。

前述の条件の 1 つでも当てはまらない場合に、パッチで InstallShield 自己登録を使用するには、QuickPatch プロジェクトの代わりに [パッチのデザイン] ビューを使用します。

### **IOC-000062534 (基本の MSI、InstallScript MSI、QuickPatch、Web)**

QuickPatch プロジェクトに自己登録ファイルが含まれる場合、または QuickPatch プロジェクトが既存の自己登録ファイルをアップデートする場合、ビルド時にパッチの検証 Val0015 が、アンインストール不可能なパッチであることを通知する警告を表示します。以前、QuickPatch プロジェクトは、ビルド時にパッチの検証を行いませんでした。

さらに、変更の一部として、QuickPatch プロジェクトおよび基本の MSI と InstallShield MSI プロジェクトの [パッチのデザイン] ビューを使って作成されたパッチで、Val0015 が ISSelfReg テーブルをチェックするようにもなりました。QuickPatch またはパッチ プロジェクトで ISSelfReg テーブルが追加された場合、Val0015 はパッチがアンインストール可能であることを警告します。以前、Val0015 はこのテーブルのエントリをチェックしませんでした。

### **IOC-000062592 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

.NET 1.1 言語パックのコマンドラインを指定したとき、.NET Framework 1.1 SP1 のインストーラーが .NET Framework 1.1 のインストーラーの前に開始された問題は今回修正されました。

### **IOC-000062599 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

Windows Mobile 搭載デバイスのインストールを含む基本の MSI および InstallScript MSI インストーラーで、Windows Vista システム上で昇格された権限を使ってインストールを起動する必要がなくなりました。昇格された権限は [実行] シーケンスでのみ必要となります。

これまで、リリースの [Setup.exe] タブで "必要実行レベル" を [管理者] オプションに設定してこの問題を回避していた場合は、今後 [起動者] に設定することができます。

### **IOC-000062718 (基本の MSI、InstallScript、InstallScript MSI、Web)**

静的リンク バージョンと動的リンク バージョンの 2 つのバージョンがあるファイルを持つコンポーネントが原因により InstallShield がクラッシュしていた問題は今回修正されました。

### **IOC-000062719 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

ダイナミック ファイル リンクに、バージョン付きファイルとバージョンなしのファイルを含むサブフォルダが含まれている状態で、バージョンなしのファイルがターゲット システムにインストールされたとき、そのファイルについてバージョン番号が設定されていましたが、この問題は今回修正されました。また、ダイナミック ファイル リンクに異なるバージョン番号を持つファイルを含むサブフォルダが含まれるとき、そのバージョン番号がオーバーライドされていた問題も今回修正されました。以前、InstallShield は、処理中のサブフォルダにある最初のファイルのバージョン番号を同フォルダ内のすべてのファイルのバージョン番号として使用していました。

### IOC-000062889 (InstallScript、InstallScript MSI)

InstallScript 関数 FeatureFileEnum の szQuery パラメータで疑問符 (?) をワイルドカード文字として使用すると、その関数で疑問符が正確に 1 文字分の代替として使用されるようになりました。以前、関数は疑問符を 1 文字または 0 文字の代替として使用していました。

### IOC-000062934 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

[リリース] ビューで、リリースの Setup.exe タブに、"パッケージ定義ファイルの生成" 設定が新しく追加されました。InstallShield 2008 では、この設定が Setup.exe タブから欠落していて、対応するチェック ボックスがリリース ウィザードで利用できました。

### IOC-000062979

.NET Framework 3.0 からのアセンブリの名前が、Filters.xml ファイルの依存関係の除外一覧に追加されました。これにより、コンポーネントの .NET 依存関係をスキャンで確認したとき、これらのアセンブリが関係としてプロジェクトに自動的に追加されることはなくなりました。

### IOC-000063013 (マージ モジュール)

マージ モジュール プロジェクトで .NET アセンブリがコンポーネントに追加されて、そのコンポーネントの "ビルド時に .NET をスキャン" に [依存関係とプロパティ] に設定されているとき、マージ モジュールがビルドされたときに実行される依存関係のスキャンで、マシン上にあるマージ モジュール内で依存関係の検索が試行されていましたが、この問題は今回修正されました。以前、依存関係のスキャンで、マシン上にあるマージ モジュールのいずれかでアセンブリの依存関係が見つかったとき、ビルド エラー -6102 と -6109 が発生していました。

### IOC-000063828 (基本の MSI、Web)

特定の条件下で 3 GB のハード ドライブ空き領域を持つマシンで特定のインストールを実行すると、"1201: セットアップは C: ドライブに 0 KB のディスク空き領域を必要とします。空き領域を増やしてから、やり直してください。" というエラーが生成されていた問題は、今回解決されました。

### IOC-000064282 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

エンド ユーザーが、SQL スクリプトが実行中にインストールを中止できるようになりました。以前、「SQL インストール スクリプトを実行しています...」メッセージが表示されている最中に、エンド ユーザーが [キャンセル] ボタンをクリックし、確認のメッセージ ボックスが表示されたときに [はい] をクリックしても、インストールが続行されました。

### IOC-000064287 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

Next コントロールのコントロール イベント名に 1 つまたは複数のアポストロフィが含まれている場合に、[カスタム アクションとシーケンス] ビューをクリックすると InstallShield がクラッシュする問題は解決されました。

### IOC-000064289 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

UpgradeCode が現在のプロジェクトから削除されている場合に、Val0008 がハンドルされていない例外をトリガすることはなくなりました。

また Val0003 を実行したときに、類似するクラッシュを引き起こすこともなくなりました。今回より、Val0003 の実行時に以前のパッケージで UpgradeCode が存在しない場合は、新しい検証エラー、「以前のパッケージには UpgradeCode プロパティ



が含まれていません。メジャー アップグレードは、UpgradeCode を持たないすべての以前のバージョンのアンインストールに失敗します。」が発生します。

### **IOC-000064368 (InstallScript)**

必要なセクションが欠落している InstallShield Professional プロジェクト (.ipr) を現在のバージョンの InstallShield で開いてから、この新しいバージョンにアップグレードすると、InstallShield が不足しているセクションについて説明するメッセージを表示します。以前は、アップグレードの最中に、致命的なエラー -112 が詳細なしで表示されるだけでした。

### **IOC-000064471 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

InstallShield は、MsiPatchOldAssemblyName テーブルの最初の列の名前に Assembly ではなく Assembly\_ を正しく使用するようになりました。

### **IOC-000064515**

InstallShield MSDE 2000 オブジェクトのプロパティを実行時に設定すると、インストールが指定された値を適切に使用するようになりました。以前、インストールは設定された値の代わりに、Property 値に格納されたデフォルト値を使用しました。

### **IOC-000064802 (基本の MSI、InstallScript MSI、マージ モジュール、Web)**

検証プログラムは、"テンプレートの概要" 設定に無効な値 (たとえば、複数のプラットフォーム、または複数のセミコロンを指定した場合) が含まれているときに、無効な致命的エラー -6304 (CUB ファイルの検証エラー) をトリガすることがなくなりました。また、"テンプレートの詳細" 設定に無効な値を入力しようとする、InstallShield が警告メッセージ ボックスが表示し、プロパティの値を変更することはできません。

### **IOC-000064847**

PropertyOverrides パラメータが指定されたときに、MSBuild が予期せずに終了する問題は解決されました。

### **IOC-000065014**

InstallShield SQL ランタイムは、改行文字として LF と CRLF の両方が使用されている SQL スクリプト ファイルを適切に解析します。以前、両方の種類の改行文字が含まれる SQL スクリプトは、構文エラー 27506 を引き起こしました。

### **IOC-000065260**

MSBuild を使ってビルドをリリースすると、MSBuild スクリプトでリリース フラグが一切指定されていないときに、そのリリース用に定義されたリリース フラグが使用されるようになりました。以前、MSBuild を使うと、プロジェクト内のリリース フラグは、常に MSBuild スクリプトで指定されたリリース フラグに設定されました。

### **IOC-000065316 (InstallScript)**

DIFxDriverPackageInstall などの InstallScript デバイス ドライバ関数が、ダイアログ スキンを適用した InstallScript プロジェクトで使用できるようになりました。以前、DIFxData.ini ファイルは InstallShield がビルドした .cab ファイルに含まれていたため、ダイアログ スキンを使用する InstallScript インストールは DIFx サポートを含みませんでした。

### **IOC-000065402**

InstallShield ヘルプ ライブラリの「ISWiFeature オブジェクト」ヘルプ トピックの SetupTypeStatus プロパティに関する説明が訂正されました。

### **IOC-000065938**

InstallShield ヘルプ ライブラリで、オートメーション インターフェイスの ISWiRelease オブジェクトのプロパティの 1 つの名前が (DistributeToLoc ではなく) 正しく DistributeLoc に訂正されました。

### **IOC-000066045 (InstallScript)**

新しく読み取り専用の SHARED SUPPORT DIR InstallScript 変数が追加されました。この変数は、メインの InstallScript インストールと、それに含まれる InstallScript オブジェクトとの間で共有されるすべてのサポートファイルを含むディレクトリを識別します。この変数に対応するテキスト置換は、<SHARED SUPPORT DIR> です。

### **IOC-000066119 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

Windows Mobile ウィザードの [cab ファイルの署名] パネルでデジタル署名情報を指定した場合、ビルド時にモバイル デバイス .cab ファイルが Binary テーブルに追加される前に署名されるようになりました。以前、署名のない .cab ファイルが署名される前に Binary テーブルに追加されていました。この結果、インストールがモバイル デバイスへのファイル転送中に、署名がない .cab ファイルをモバイル デバイスにインストールする試みが行われていました。

### **IOC-000067058 (基本の MSI、InstallScript MSI、マージ モジュール、Web)**

[カスタム アクションとシーケンス] ビュー または、[カスタム アクション] ビューにある VBScript カスタム アクションの [スクリプト] タブ内から TAB キーを押したとき、新しいタブがスクリプトに追加されていましたが、この問題は今回修正されました。以前、フォーカスが InstallShield インターフェイスの別の場所に変わっていました。

### **IOC-000067059 (InstallScript)**

InstallScript プロジェクトでは、ISWiProperties コレクションはサポートされていません。この自動インターフェイス コレクションが、InstallScript プロジェクトの自動インターフェイス スクリプトで呼び出されたとき、プロパティが InstallScript プロジェクトでサポートされていないという説明がエラー メッセージで表示されます。以前、エラー メッセージでは、"InstallScript" ではなく "Professional" という語が使われていました。

### **IOC-000067155 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

Windows Vista システム上で UAC が無効であり、エンド ユーザーが制限付きユーザー アカウントを使用している場合、昇格を必要とする InstallShield 前提条件が、エンド ユーザーに対して [インストール] ボタンまたは [キャンセル] ボタンのクリックを求めるプロンプトを表示します。この場合に、エンド ユーザーが [インストール] ボタンをクリックすると、[インストール] ボタンまたは [キャンセル] ボタンのクリックを求める同じダイアログが、エンド ユーザーに再び表示されます。以前、このケースでは、セットアップの前提条件ダイアログが自動的に無限ループに入っていました。

### **IOC-000067156 (InstallScript)**

リリース ウィザードの [メディアの種類] パネルで、[カスタム] メディア タイプのフォーマット サイズを 4 GB より大きい値に設定することができるようになりました。

### **IOC-000067196 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

Windows Server 2008 システムでインストールを実行しているとき、インストールに [インターネット インフォメーション サービス] ビューで構成された IIS Web サイトとアプリケーション プールが含まれていた場合、実行時エラー 2005 が発生していましたが、この問題は修正されました。

### **IOC-000067277**

InstallShield をインストールするとき、今回より含まれているマージ モジュールは InstallShield Program Files フォルダの Modules\i386 サブフォルダにインストールされます。この場所にインストールされるのは、この場所が共有の場所ではないためです。他のアプリケーションによってもこれらのマージ モジュールがインストールされる場合、別の場所にインストールされません。

以前、InstallShield がインストールされたとき、マージ モジュールは、Program Files フォルダ内にある Common Files\Merge Modules サブフォルダにインストールされていました。この場所は、サードパーティ アプリケーションによってマージ モジュールがインストールされる時に使用されることがあります。このため、マージ モジュールが適切にバージョン化されていない場合、あるアプリケーションをマージ モジュールと共にインストールしたとき、別のアプリケーションと共にインストールされたマージ モジュールがダウングレードされる可能性があります。

### **IOC-000067333 (基本の MSI、Web)**

InstallShield は、.rtf ファイルの終わりを正しく識別するようになりました。以前、場合によって、InstallShield が .rtf ファイルの終わりを正しく識別せず、.rtf ストリームの終わりに余分なデータが受け渡される原因となっていました。

### **IOC-000067683 (基本の MSI、InstallScript MSI、マージ モジュール、Web)**

プロパティを設定するシステム検索を作成してから、そのシステム検索をプロジェクトから削除したとき、そのプロパティが Property テーブルから削除されていましたが、この問題は今回修正されました。以前、プロパティがプロジェクトの他の場所で使用されているときも、自動的に削除されていました。

### **IOC-000067717 (InstallScript)**

言語の選択ダイアログを表示する複数言語、複数インスタンス InstallScript インストールで、インスタンスの選択ダイアログが言語の選択ダイアログの前に表示されるようになりました。ダイアログの順番が変更されたことにより、エンドユーザーが製品の新しいインスタンスに異なる言語を選択することができるようになりました。インスタンスの選択ダイアログで、エンドユーザーが既存のインスタンスを保持することを指定した場合、言語の選択ダイアログは表示されません。インスタンスの選択ダイアログが表示されるとき、言語の選択ダイアログが表示されるときと同じ言語で表示されます。

非複数インスタンス インストールの複数のインスタンスが、Setup.exe /ig コマンドライン パラメータを通してインストールされた場合、言語の選択ダイアログは初回インストールでのみ表示され、メンテナンス モードでは表示されません。これにより、元のインストールが実行され、その機能がインストールされたときに使用された言語が、元のインストールの修復でも使用されるようになります。また、初回でインストールされず、メンテナンス モードでインストールされた機能を追加するときにも、この言語が使用されます。

### **IOC-000067949 (InstallScript)**

InstallScript Setup.exe コマンドライン パラメータ /l、/ig、/hide\_progress、/hide\_splash、および /hide\_usd が -runfromtemp パラメータと共に使用されたとき、または、InstallScript One-Click Install インストールで使用されたとき無視されていましたが、この問題は今回解決されました。

### **IOC-000068118 (マージ モジュール)**

マージ モジュール GUID が、Merge Module テンプレートから作成された マージ モジュール プロジェクトのすべてのテーブルで適切に更新されるようになりました。以前、CustomAction テーブルなどの一部テーブルが更新されないことがありました。

### **IOC-000068176**

[コンポーネント サービス] ビューにある [ロールと共にユーザー ID をインストールする] チェック ボックスの説明が InstallShield ヘルプ ライブラリに追加されました。

### **IOC-000068413 (InstallScript MSI)**

他のアップグレード アイテムがない InstallScript MSI プロジェクトの [アップグレード] ビューで自動アップグレード アイテムを追加したとき、今回よりビルド エラー 6422 が発生しなくなりました。以前、InstallShield がビルド時に自動アップグレード アイテムにメジャー アップグレードを作成しようと試みたとき、このエラーが発生しました。

### **IOC-000068536 (基本の MSI、InstallScript MSI、マージ モジュール、Web)**

[INI ファイル変更] ビューから .ini ファイルを削除したとき、その .ini ファイルがプロジェクトから適切に削除されるようになりました。以前、このシナリオでは、.ini ファイルが削除されてから再度プロジェクトを開いたとき、.ini ファイルがまだプロジェクトに存在し、キーワードまたはセクションのみが .ini ファイルから削除されていました。

### **IOC-000068538**

リリース ウィザードで、DVD-9 メディア タイプのサイズが正しく 7.95 GB と表示されるようになりました。以前、サイズが 7.36 GB と表示されていました。

### **IOC-000068702 (基本の MSI、InstallScript MSI、マージ モジュール、Web)**

システム検索ウィザードを利用して、[フォルダ パス、特定のフォルダで特定のファイルを検索する] タイプのシステム検索を作成または修正したとき、エラーが表示されていましたが、この問題は今回修正されました。以前、[ファイルの詳細] ダイアログボックスがシステム検索ウィザードから開かれたとき、あるケースでエラーが表示され、ウィザードが終了しませんでした。

### IOC-000068802 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)

InstallShield ヘルプ ライブラリに、Setup.exe を起動するときにコマンドライン プロンプトで /v パラメータを使用する場合、Setup.ini にある CmdLine キー名に指定されたパラメータはすべて無視されますという説明が追加されました。

### IOC-000068663 (マージ モジュール)

マージ モジュール プロジェクトのサブフォルダにダイナミック ファイル リンクを追加して、[ファイルとフォルダ] ビューに移動してから、ダイナミック リンク サブフォルダのコンポーネントを右クリックしたとき、適切なコンテキスト コマンド ([名前の変更]、[削除]、[プロパティ] など) が適切に無効化されるようになりました。以前、これらのコンテキスト コマンドが無効にされませんでした。これらのコマンドを選択したとき、InstallShield がクラッシュしていました。

### IOC-000068927 (InstallScript)

InstallScript の複数インスタンスの差分リリースで、インストールの選択ダイアログが適切に表示されるようになりました。以前、複数インスタンスの差分リリースで、インスタンスの選択ダイアログが表示されず、更新する適切なインスタンスが選択されませんでした。代わりに、適切なバージョンがインストールされていないというエラー メッセージが表示されていました。

### IOC-000068931 (InstallScript)

Setup.exe /ig または /ig コマンドライン パラメータが使用されてインストールされたインスタンスが 2 つ以上あるシステムで非複数インスタンスが実行されたとき、インスタンスの選択ダイアログが表示されます。非複数インスタンスのインストールでは、新しいインスタンスに対して新しい GUID がランダムに生成されないため、インスタンスの選択ダイアログでは新しいインスタンスをインストールできません。インスタンスの選択ダイアログには、GUID が製品の GUID に一致するインスタンスがインストールされていて、かつ、それがメンテナンス可能なインスタンスの 1 つである場合、それが "デフォルト" のインスタンスとして表示されます。この動作は、InstallShield 2009 におけるすべての新規プロジェクト、および以前のバージョンから InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクトに適用します。

インスタンスが 1 つのみインストールされている場合、インストール済みインスタンスが自動的にメンテナンスされる試みが行われ、インスタンスの選択ダイアログは表示されません。これは、インストールされているインスタンスがデフォルトのインスタンスではない場合も当てはまります。この動作の結果、デフォルトのインスタンスがインストールされていなく、非デフォルトのインスタンスが (/ig パラメータが使用されて) インストールされている場合、デフォルトのインスタンスは、(a) 最初に非デフォルトのインスタンスをアンインストールするか、または、(b) /ig パラメータを使ってデフォルト インスタンスの GUID を指定しないかぎり、インストールまたはメンテナンスできません。したがって、/ig パラメータを使って、複数インスタンスをインストールすることが可能な場合、常にこのパラメータを使用することをお勧めします。この動作は、InstallShield 2009 におけるすべての新規プロジェクト、および以前のバージョンから InstallShield 2009 にアップグレードされたプロジェクトに適用します。

InstallShield 2008 では、非複数インスタンスのインストールが、複数のインスタンスがインストールされているターゲット システムで実行された場合、インスタンスの選択ダイアログは表示されませんでした。このようなケースでは、デフォルトのインスタンスが常に使用されていました。InstallShield 12 以前では、非複数インスタンスのインストールが、複数のインスタンスがインストールされているターゲット システムで実行された場合、インスタンスの選択ダイアログは表示されましたが、非複数インスタンスのインストールでは新しいインスタンスに対して新しい GUID がランダムに生成されないため、インスタンスの選択ダイアログでは新しいインスタンスを表示できませんでした。しかしながら、ダイアログのタイトル バーで、エンドユーザーが更新するインスタンスを選択する必要があるというメッセージが表示されていました。エンドユーザーが更新またはメンテナンスを行うインスタンスを選択する必要があるというメッセージが本来表示されるべきでした。

### IOC-000069234 (InstallScript MSI)

Disable(PCRESTORE) を使って、InstallScript MSI インストールでシステムの復元機能を無効にすることができるようになりました。以前、InstallScript MSI インストールでシステムの復元を無効にしようとしても、スクリプトが実行を開始するまでに復元ポイントが既に開かれ、Disable(PCRESTORE) が呼ばれても閉じないため、機能しませんでした。

今回より、ファイルの転送が開始される直前に復元ポイントが開かれ、復元ポイントが正しい種類 (インストール、構成、アンインストール) として作成されます。以前、セットアップの初期化中に復元ポイントが開かれていました。

復元ポイントは、管理インストール中に作成されなくなりました。

今回より `Disable(PCRESTORE)` を呼び出したとき、開いている復元ポイントがすべてキャンセルされるようになったため、復元機能は、インストール中、いつでもオフにすることができます。

新しい `SYSTEM_RESTORE_ENABLED` 定数を `Is` 関数と使用して、システムの復元機能が有効または無効であるかを判別することができます。

### **IOC-000069321 (基本の MSI、InstallScript MSI、マージ モジュール、Web)**

[製品の条件ビルダ] ダイアログ ボックスとその [条件] 列と [メッセージ] 列で幅が調節され、条件とそれに対応するメッセージ文字列が読みやすくなりました。

### **IOC-000069402 (基本の MSI、InstallScript MSI、Web)**

今回から、インストールに `InstallShield` 前提条件が含まれていて、かつ、インストールの `Setup.exe` ファイルを `/a` パラメータを使ってコマンドラインから起動し、かつ、`/a` パラメータのあとにパスを追加して、前提条件をその場所 (例、`Setup.exe /a"C:\temp"`) に抽出する場合、`InstallShield` 前提条件が指定された場所に適切に抽出されます。以前、パスが `/a` パラメータの後に追加されたとき、インストールが完了せず、ファイルがターゲット システムにコピーされませんでした。

### **IOC-000069917 (InstallScript)**

`Ether` オブジェクトの `SetProperty` メソッドで唯一サポートされているプロパティは `is::CmdLine` です。 `InstallScript One-Click Install` インストールにこのプロパティを使用すると、`Setup.exe` コマンドライン パラメータを指定できます。

`InstallShield` ヘルプ ライブラリの「`ISWiComponent` オブジェクト」ヘルプ トピックが修正され、この情報が追加されました。

## ***InstallShield 2009 でアップデートされた InstallScript オブジェクトとオブジェクト テンプレート***

`InstallShield 2009 InstallScript` プロジェクトで使用できる `InstallScript` オブジェクトと `InstallScript` オブジェクト テンプレートが大幅に改良されました。

インターネット接続が利用できる場合、`InstallShield` の [アップデートの確認] 機能を使って、使用中の `InstallShield` バージョン用の `InstallScript` オブジェクトとオブジェクト テンプレートのアップデートを取得できます。 アップデートを確認するには、[ツール] メニューで [アップデートの確認] をクリックします。 `InstallShield` が `FLEXnet Connect` を起動して、アップデートを確認します。

`InstallShield` がインストールされているコンピュータをインターネットに接続できない場合は、インターネット接続が利用できるコンピュータから <http://www.acresso.com> の [ダウンロード] セクションにアクセスして、アップデートされた `InstallScript` オブジェクトとテンプレートをダウンロードしてから、リムーバブル ディスクに保存し、これらを `InstallShield` がインストールされているコンピュータに転送してください。

### **Access 97 オブジェクト**

`Access 97` オブジェクトに変更はありません。 このオブジェクトの最新バージョンは **4.00** です。

このオブジェクトは、`InstallShield InstallScript Legacy Object` インストールの一部として提供されています。

### **BDE 5.11 オブジェクト (IOC-000062126、IOC-000062245)**

`BDE 5.11` オブジェクトがアップデートされました。 このアップデート済みオブジェクト (バージョン **4.01**) に、`DAO 3.6` オブジェクトは含まれていません。 このオブジェクトの以前のバージョンには、`DAO 3.6` が含まれていました。

このオブジェクトから、次の古い定義済み文字列テーブルエントリが削除されました:

- `PRODUCT_NAME`

- COMPANY\_NAME
- PRODUCT\_VERSION
- FOLDER\_NAME

また、OBJECT\_NAME 文字列テーブル エントリが追加されました。

更新済みのオブジェクトは InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として利用できます。

### **Crystal Reports 8 オブジェクト (IOC-000062126)**

Crystal Reports 8 オブジェクト (バージョン 4.00)では、次の古い定義済み文字列テーブルエントリが削除されました:

- PRODUCT\_NAME
- COMPANY\_NAME
- PRODUCT\_VERSION
- PRODUCT\_KEY
- FOLDER\_NAME

また、OBJECT\_NAME 文字列テーブル エントリが追加されました。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### **Crystal Reports 8.5 オブジェクト (IOC-000062126)**

次の古い定義済み文字列テーブル エントリが、Crystal Reports 8.5 オブジェクト(バージョン 4.00) から削除されました:

- PRODUCT\_NAME
- COMPANY\_NAME
- PRODUCT\_VERSION
- PRODUCT\_KEY
- FOLDER\_NAME

また、OBJECT\_NAME 文字列テーブル エントリが追加されました。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### **DAO 3.5 オブジェクト (IOC-000062000)**

DAO 3.5 オブジェクトがアップデートされました。 このアップデート済みオブジェクト (バージョン 5.00) について、次の点にご注意ください。

- OLE オートメーション ファイルをインストールしません。 以前のバージョンは、これを行いました。
- RDO または Jet 4.0 オブジェクトを埋め込みません。そのため、不要となったウィザードは削除されました。
- msvcrt.dll の VC6 SP6 バージョンを配布します (SP6 で、このオブジェクト用のその他の再配布可能ファイルはアップデートされていません)。
- 常に DAO350.dll と Dao2535.tlb を <COMMONFILES>\Microsoft Shared\DAO へインストールします。 オブジェクトの以前のバージョンは、COMMONFILES の場所を手動で決定しようと試みました。
- ファイルのアンインストールは行いません。 オブジェクトの以前のバージョンでは、WINSYSDIR にインストールされたファイルは Corecomp.ini にあるためアンインストールされませんでした。 また、DAO350.dll と Dao2535.tlb はアンインストールされました。

メモ: DAO350.dll は Windows Vista では登録されません。 これは Windows Vista の既知の問題です。

この更新されたオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### DAO 3.6 オブジェクト

DAO 3.6 オブジェクトは、Jet 4.0 SP8 再配布可能ファイルに DAO 3.60 ファイルが含まれるため、利用できなくなりました。

### DCOM95 1.3 オブジェクト

DCOM95 1.3 オブジェクトに変更はありません。このオブジェクトの最新バージョンは 4.00 です。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### DCOM 構成 (DCOMcnfg) オブジェクト (IOC-000062126)

STR\_ERROR\_GENERAL\_ERROR (一般的なエラー) 文字列テーブル エントリが DCOMcnfg オブジェクトに追加されました。このオブジェクトの最新バージョンは 4.01 です。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### DCOM Deployment オブジェクト (IOC-000062126)

古い PRODUCT\_NAME 定義済み文字列テーブル エントリは、DCOM Deployment オブジェクト (バージョン 4.00) から削除されました。また、OBJECT\_NAME 文字列テーブル エントリが追加されました。このオブジェクトの最新バージョンは 4.01 です。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### DirectX (9.0c) オブジェクト (IOC-000062126)

STR\_ERROR\_GENERAL\_ERROR (一般的なエラー) 文字列テーブル エントリが DirectX オブジェクトに追加されました。このオブジェクトの最新バージョンは 5.01 です。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### InstallShield 2009 オブジェクト インストーラ

InstallShield がインストールされる時、同時に InstallShield の [オブジェクト] ビューに表示される InstallShield 2009 オブジェクト インストーラがインストールされます。

### Jet 3.51 オブジェクト

Jet 3.51 オブジェクトがアップデートされました。今後は、OLE オートメーション ファイルをインストールしません。このオブジェクトの最新バージョンは 4.01 です。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### Jet 4.0 (DAO 3.6 を含む) オブジェクト (IOC-000062126、IOC-000061949)

Jet 4.0 オブジェクトがアップデートされました。このアップデート済みオブジェクト (バージョン 4.11) について、次の点にご注意ください。

- OLE オートメーション ファイルをインストールしません。以前のバージョンは、これを行いました。
- Jet 4.0 SP8 再配布可能ファイルには DAO 3.60 ファイルが含まれているため、このオブジェクトの名前に DAO 3.6 が追加されました。
- Windows Me に SP8 をインストールします。以前は SP7 がインストールされました。
- すべてのサポート対象プラットフォームでステータスを設定します。サポート対象プラットフォームについての詳細は、InstallShield の [オブジェクト] ビューでこのオブジェクトを選択すると表示されるヘルプを参照してください。
- ShowStatusText プロパティをサポートし、StatusText プロパティのデフォルト値を含みます。
- STR\_ERROR\_GENERAL\_ERROR (一般的なエラー) 文字列テーブル エントリが追加されました。

このオブジェクトについての詳細は、[オブジェクト] ビューでこのオブジェクトを選択すると表示されるヘルプを参照してください。

DAO 3.6 オブジェクトは、今後使用できなくなりました。

Jet 4.0 (DAO 3.6 を含む) オブジェクトは、InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### JRE 1.5 オブジェクト

JRE 1.5 オブジェクトに変更はありません。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### MDAC 2.5 オブジェクト (IOC-000062126、IOC-000062191)

MDAC 2.5 オブジェクトがアップデートされました。このアップデート済みオブジェクト (バージョン 5.00) について、次の点にご注意ください。

- Internet Explorer 3.02 を要件として強制します。
- DCOM95 は含まず、そのインストールも行いません。このオブジェクトの以前のバージョンはこれを含み、インストールを行いません。これは、Internet Explorer 3.02 以降は DCOM を含み、InstallScript インストールが DCOM のインストールを必要とするために変更されました。
- 再配布可能ファイルの OnInstalledFile イベント中に MDAC 再配布可能ファイルを起動します。
- デフォルト ステータス テキストを含み、ShowStatusText イベントをサポートします。
- STR\_ERROR\_GENERAL\_ERROR (一般的なエラー) 文字列テーブル エントリが追加されました。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### MDAC 2.8 オブジェクト (IOC-000061531)

MDAC 2.8 オブジェクトがアップデートされました。このアップデート済みオブジェクト (バージョン 5.00) について、次の点にご注意ください。

- MDAC 再配布可能ファイルの SP1 バージョンをインストールします。
- 再配布可能ファイルの OnInstalledFile イベント中に MDAC 再配布可能ファイルを起動します。
- デフォルト ステータス テキストを含み、ShowStatusText イベントをサポートします。
- STR\_ERROR\_GENERAL\_ERROR (一般的なエラー) 文字列テーブル エントリが追加されました。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### マージ モジュール ホルダ オブジェクト

InstallScript プロジェクトにマージ モジュールを追加すると、InstallShield が自動的にマージ モジュール ホルダ オブジェクトをプロジェクトに含みます。

このオブジェクト インストーラは、InstallShield がインストールされるときに一緒にインストールされます。

### MFC 6 Runtime オブジェクト

[オブジェクト] ビューで MFC 6 Runtime オブジェクトを選択したときに表示されるヘルプ ペインが修正されました。このオブジェクトのバージョン 番号は 4.00 と正しく表示されます。以前、バージョン番号が 5.00 と表示されていました。このオブジェクトにその他の変更はありません。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### Microsoft .NET Framework オブジェクト



Microsoft .NET Framework オブジェクトがアップデートされました。今回より、.NET Framework 3.0 言語パックが含まれます。このオブジェクトの最新バージョンは 1.01 です。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript .NET インストールの一部として提供されています。このインストールには、次の文字列エントリが追加されました：

- **MSG\_ERROR\_NOT\_ADMIN** — このインストールは管理者権限を使って実行しなくてはなりません。このシステム上での管理者権限がありません。管理者権限を使ってログインして、インストールを再開してください。
- **MSG\_ERROR\_WIN95** — このインストールには Windows 2000、XP、2003、またはそれ以降が必要です。

### **MSDE 2000 オブジェクト**

MSDE 2000 オブジェクト用の MSDE2000\_INSTANCE\_LIMIT の名前が正しく MSDE2000\_INSTANCE\_LIMIT\_DESC に修正されました。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### **NT Services オブジェクト**

NT Services オブジェクトに変更はありません。このオブジェクトの最新バージョンは 4.00 です。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### **ODBC 構成オブジェクト (IOC-000062158)**

ODBC 3.51 オブジェクトが ODBC 構成オブジェクトと差し替えられました。このアップデート済みオブジェクト (バージョン 5.00) について、次の点にご注意ください。

- ODBC ファイルは MDAC オブジェクトによってインストールされるため、これはファイルをインストールしません。このオブジェクトの以前のバージョンでは、ファイルがインストールされました。
- ODBC 3.51 オブジェクトと同じ GUID を持ちます。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### **OLE Automation (2.4) Runtime ファイル**

OLE Automation 2.4 Runtime ファイルは、新しいオブジェクト (バージョン 1.00) として利用できるようになりました。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### **OLE DB 2.1 オブジェクト**

OLE DB 2.1 オブジェクトは使用できなくなりました。このオブジェクトのファイルは、MDAC 2.5 オブジェクトに含まれます。

### **Palm OS オブジェクト (IOC-000062126)**

Palm OS オブジェクト (バージョン 5.01) で、スクリプトリファレンスが PALM\_UNSPECIFIED\_ERROR 文字列テーブル エントリではなく、PALM\_UNSPECIFIED\_ERROR\_DESC 文字列テーブル エントリをポイントするように更新されました。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### **RDO 2.0 オブジェクト (IOC-000061999)**

RDO 2.0 オブジェクトがアップデートされました。このアップデート済みオブジェクト (バージョン 5.00) について、次の点にご注意ください。

- OLE オートメーション ファイルをインストールしません。以前のバージョンは、これを行いました。
- すべてのファイルの SP6 バージョンをインストールします。

- ODBC ファイルはいずれもインストールしません。(このオブジェクトは、デフォルトで MDAC を含まないプラットフォーム上では MDAC オブジェクトと一緒に使用してください。)
- すべての適切なプラットフォーム上で管理者権限を確認します。このオブジェクトの以前のバージョンでは、Windows NT4 と Windows 2000 上でのみ確認されました。
- 無効なプラットフォーム (Windows 95A または Windows NT 4.0 SP2 以前) を確認します。このオブジェクトの古いバージョンでは、確認されませんでした。
- あんちんストール中に、RDO ファイルはいずれもアンインストールされません。このオブジェクトの古いバージョンでは、アンインストールされるファイルとアンインストールされないファイルがありました。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### Visual Basic リモート サーバー展開オブジェクト

Visual Basic リモート サーバー展開オブジェクトに変更はありません。このオブジェクトの最新バージョンは 4.00 です。

このオブジェクトは、InstallShield InstallScript Legacy Object インストールの一部として提供されています。

### Visual Basic Runtime オブジェクト (IOA-000029805)

新しく Visual Basic Runtime オブジェクトが追加されました。このオブジェクトは VB5 と VB6 ランタイムオブジェクトの両方の最新版です。このオブジェクトについて以下の点にご注意ください:

- OLE オートメーション ファイルをインストールしません。以前の VB5 と VB 6 オブジェクトは、これを行いました。
- これを使って、VB 5 または VB6 再配布可能ファイルのどちらかを含める事ができます。
- すべてのファイルをインストールするために、直接ファイルをインストールするのではなく、VB5 と BV6 用の標準 Microsoft 再配布可能ファイルを使用します。したがって、Windows Vista を含むすべてのプラットフォーム上で適切に動作します。
- VB5 または VB6 再配布可能ファイルに含まれていないファイルはインストールしません。(詳細については、InstallShield の [オブジェクト] ビューでこのオブジェクトを選択すると表示されるヘルプを参照してください。) このオブジェクトの以前のバージョンでは、追加ファイルがインストールされました。
- 新しい StatusText と ShowStatusText プロパティをサポートします。詳細については、InstallShield の [オブジェクト] ビューでこのオブジェクトを選択すると表示されるヘルプを参照してください。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### Windows Installer 3.x エンジン オブジェクト (IOC-000062126)

Windows Installer 3.x エンジン オブジェクトには、以下の文字列テーブル エントリが追加されました:

OBJ\_STATUS\_FILELAUNCH\_DESC — 埋め込みインストーラの起動に失敗しました

このオブジェクトの最新バージョンは 1.11 です。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### Windows Mobile オブジェクト

Windows Mobile オブジェクトがアップデートされました。このオブジェクト (バージョン 4.00) から、次の古い定義済み文字列テーブルエントリが削除されました:

- PRODUCT\_NAME
- COMPANY\_NAME
- PRODUCT\_VERSION
- PRODUCT\_KEY

- FOLDER\_NAME

また、OBJECT\_NAME 文字列テーブル エントリが追加されました。

このオブジェクトは InstallShield InstallScript Object インストールの一部として提供されています。

### **InstallScript オブジェクト テンプレート (IOC-000062741)**

InstallScript オブジェクト テンプレートがアップデートされました。 InstallScript オブジェクト テンプレートのインストールには、以下のオブジェクトのテンプレートが含まれています:

- Access 97
- DAO 3,5
- DCOM95 1.3
- DCOM 構成 (DCOMcnfg) オブジェクト
- DirectX (9.0c)
- Jet 3.51
- Jet 4.0 (DAO 3.6 を含む)
- JRE 1.5
- MDAC 2.5
- MDAC 2.8
- MFC 6 Runtime
- MSDE 2000
- NT サービス
- ODBC 構成
- OLE Automation (2.4) Runtime ファイル
- RDO 2.0
- Visual Basic リモート サーバー展開オブジェクト
- Visual Basic Runtime オブジェクト
- Windows Installer 3.x エンジン オブジェクト

ファイル サイズが大きいため、Microsoft .NET Framework オブジェクト テンプレートは個別のインストールとして利用できるようになりました。

## システム要件

このセクションでは、InstallShield で作成されたインストールを実行するターゲット システム (ランタイム環境) の要件、ならびに InstallShield を実行するために必要なシステム (オーサリング環境) の要件が説明されています。

### **InstallShield を実行するシステムの要件**

#### **プロセッサ**

Pentium III クラスの PC (500 MHz 以上を推奨)

#### **RAM**

256 MB の RAM (512 MB 推奨)

## ハードディスク

500 MB 空き領域

## ディスプレイ

1024 x 768 (XGA) 以上の解像度

## オペレーティング システム

Windows 2000 SP3 以降

Windows XP

Windows Server 2003

Windows Vista

Windows Server 2008

## ブラウザ

Microsoft Internet Explorer 5.01 (IE 5.5 以降を推奨)

## 権限

システムの管理者権限

## マウス

Microsoft IntelliMouse、またはその他の互換性があるポインティング デバイス

## ターゲット システム (デスクトップ コンピュータ) の要件

ターゲット システムは、次のオペレーティング システムの最低要件を満たさなくてはなりません:

Windows 2000

Windows XP

Windows Server 2003

Windows Vista

Windows Server 2008

## ターゲット システム (モバイル デバイス) の要件

InstallShield に、Microsoft Windows Mobile Device Center または Microsoft ActiveSync を使用するデスクトップ インストールにモバイル デバイス インストール追加してファイルをモバイル デバイスに転送することができるサポートが追加されました。

InstallShield では、Windows Mobile Device Center や ActiveSync、または他のデスクトップ コンポーネントを使用しないデバイスを直接ターゲットするインストールもサポートされています。

InstallShield がサポートする各オプションの概要については、InstallShield ヘルプ ライブラリの「モバイル デバイスにインストールを作成する」を参照してください。

## Windows Mobile デバイスの要件

InstallShield では、多数の Windows Mobile プラットフォームおよびプロセッサがサポートされています。以下は、Windows Mobile プラットフォームの一覧です。

- Windows Mobile 6.x Professional と Classic
- Windows Mobile 6.x Standard
- Windows Embedded CE 6.x

- Windows Mobile 5.0 for Pocket PC
- Windows Mobile 5.0 for Smartphone
- Windows CE .NET 5.0
- Windows CE .NET 4.x
- Pocket PC 2003
- Pocket PC 2002
- Pocket PC
- Palm-size PC 2.11
- Palm-size PC 2.01
- Handheld PC 2000
- Handheld PC Pro
- Handheld PC 2.0
- Smartphone 2003
- Smartphone 2002

InstallShield は、この一覧にないプラットフォームもサポートしますが、デフォルトで条件設定ができないという点で上記のプラットフォームと異なります。追加のプラットフォームのサポートを追加する場合、または、特定のプラットフォームをターゲットするときの条件を変更する場合、InstallShield と共にインストールされている **Settings.xml** を変更することができます。詳しい情報については、InstallShield ヘルプ ライブラリの「使用可能な Windows Mobile プラットフォームの一覧またはその詳細設定を更新する」を参照してください。

InstallShield では、次の Windows Mobile プロセッサがサポートされています。

- ARM920
- ARM820
- ARM720
- Common Executable Format (CEF)
- Hitachi SH4
- Hitachi SH3E
- Hitachi SH3
- i686
- i586
- i486
- MIPS R4000
- MIPS R3000
- MIPS R2000
- SHx SH4
- SHx SH3
- StrongARM-XScale

### **Palm OS デバイスの要件**

InstallShield では、Palm OS 3.5 以降がサポートされています。

### Windows Mobile デバイス インストールのデスクトップ要件

Windows Mobile デバイスにアプリケーションをインストールするために使用されるデスクトップ コンピュータの要件は以下のとおりです。

- Windows XP 上にある Microsoft ActiveSync 3.x 以降 (Windows Mobile 5.x 以降のデバイスには ActiveSync 4.x が必要です)
- Windows Vista 上の Microsoft Windows Mobile Device Center
- 管理者権限

### Palm OS デバイス インストールのデスクトップ要件

Palm HotSync は、Palm OS デバイスにアプリケーションをインストールするために使用されるデスクトップ コンピュータに必要です。

#### 既知の問題

既知の問題の一覧は、ナレッジベースの記事「[Q200152](#)」を参照してください。